

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第七十巻 第六号



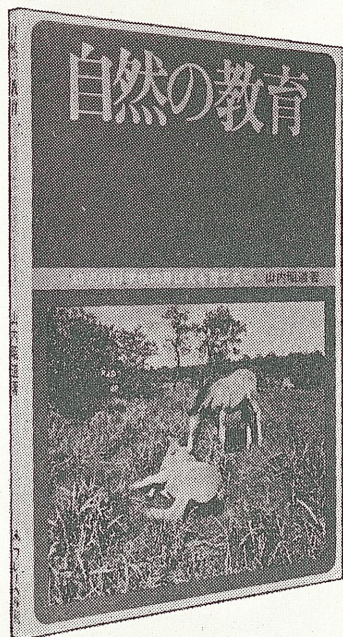
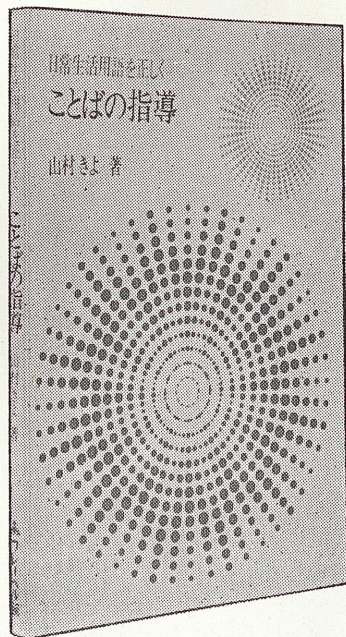
6

日本幼稚園協会

フレーベル館の保育図書

日常生活用語を正しく

幼児の科学性の芽ばえを育てる



ことばの指導

山村きよ 著

成長の著しい幼児期は、ことばを覚えて思考しながら、自分のことばを作り出す大切な時です。本書は、聞く態度を養い、人にわかることばを使うよう、ことばの正しい使い方を指導する教師の心構えと、実践法を説いたものです。

A 5判 130頁 400円 千70円

自然の教育

山内昭道 著

保育実践のなかで科学性の芽ばえをいかに育てていくか」という課題を自然の教育を通して展開した書です。単に活動例を集めたものと違って、自然愛護、科学と情報の接点等、筆者の長年培われた思想から洞察されています。

B 5判 116頁 450円 千90円

幼児の教育

第七十卷 第六号





幼児の教育 目次

第七十卷 六月号

表紙 小野木 学
 カット 斎藤 信也

★講演

幼児の才能開発……………牛島 義友(4)

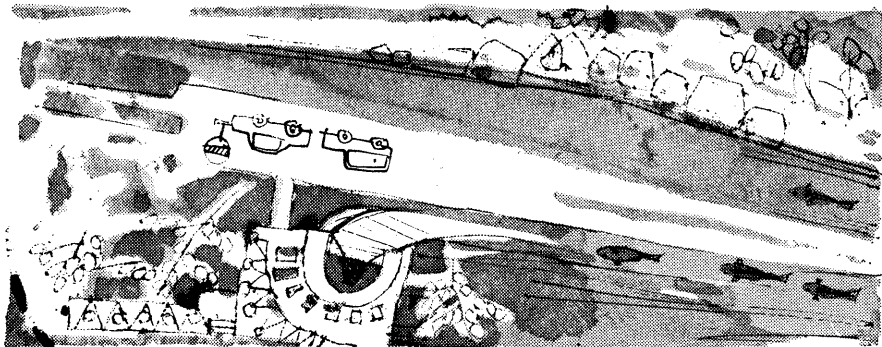
都市化と幼児(3)

続・遊び場の本質的価値……………塩川 寿平(11)

子どもの文化(その三)

児童文化にかかわる子どもの役割……………本田 和子(20)

ある研究会で — 周郷先生のお話 —……………(28)



特殊幼児の保育……………渡辺祝子…(30)

★ユートピア—かべの耳が聞いた話……………清水光子…(36)

三歳児と一年間を過ごして……………鈴木直美…(38)

困ったこと……………丸山ふみ…(44)

★こんな本・あんな本……………村石京子…(48)

小学校入学直前の幼稚園の生活(一)

お茶の水女子大学幼児保育研究室…(50)

ヨーロッパの旅(十二)……………平井信義…(57)

愛珠・想い出するままに(四)……………中村道子…(63)

編集委員・周郷博・守永英子
 編集主任・津守真・赤間峰子
 本田和子・鈴木直美
 寺井直子

◇講演◇

幼児の才能開発



牛 島 義 友

偉人と才能教育

「幼児の才能開発」ということでお話をするわけですが、いわゆる才能教育というものは、それをしたから立派な人間になったとか、あるいは、しなかったからだめなんだ、というようなものでもないで、単純に肯定してはいけません。

そのことについて二、三事例をあげてみますと、有名な数学者のパスカル（一六二三年生まれ）ですが、この人の父は、フランスの役人で技術屋でした。パスカルが七歳の時、息子の教育のことを考え、役所をやめ、自分が家で教育をした。子どもが大きくなってから、できるだけ正確なものの考え方ができるような理性

の訓練が大事であると考え、食事の時間などに、つめこみでなく、ゲームなどの方法で教えた。それから、自分で考える習慣を身につけるように、文法を徹底的に教え、数学などは教えなかった。しかしパスカルは十二歳のころに、一人で幾何の問題を勉強して、自分でいろいろと考えながら、たとえば「三角形の内角の和は二直角である」と、自己流に証明したというのであります。これなんか徹底的に幼児教育をし、そして立派なパスカルという哲学者、数学者を生み出した例かもしれません。

次に、ジョン・ウエスレーという人ですが、この人は、イギリス人ですが、学校へはいかず、家で教育を受けた。父がラテン語とギリシャ語を教え、母がそれ以外の課目を受け持ち、午前三時

間午後三時間勉強したというのであります。

次に、有名なカール・ウィッテという人の話がありますが、この人は一八〇〇年ごろに生まれたドイツの学者ですが、この父親は、この子のための、この子の教育について、千ページ以上の本を残しています。

今でも時々引用されますが、これによりますと、普通は幼児時代は子どものすきなように遊ばせておけばよいというけれど、それはまちがっている。やはり小さい赤ん坊の時から、見たり、聞いたり、触れたりということを通して、計画的に指導し教育しなければいけない。たとえば、赤ちゃんが指をつかんだら「ゆび」というように、ものの名前をちゃんと教える。そしてだんだんに、人差し指とか中指というように、かえていって教える、この場合、決して、いわゆる赤ちゃん言葉などは使ってはいけない。

また、知識のことでなく、「しつけ」というような問題も、非常に手を加えてありまして、たとえば、コーヒーを飲むしつけの場合に、お客さんに行って、うっかりしてミルクをこぼしてしまった時、母親は家に帰ってから、その子にパンと塩以外はやらなかった。そのようにしてコーヒーの飲み方のしつけをしたといえます。三歳ごろから、博物館などいろいろなところを見学させたり、あるいは友だちはえらんで遊ばせたりした。

またそのころから読み書きを教え、自分でものを知ろうとする

力をつけさせた。この結果六歳ごろにフランス語を始め、約一年で読めるようになった。次はイタリ語をやり、六ヶ月で読めるようになり、次に英語、ラテン語というふうにして、八歳ごろには、ホーマーだとか、ブルータークだとか、キケロなど、それほど困難なしに読んでいたのであります。九歳の時に、ライプツヒヒ大学で特別の試験を受けさせてもらって、大学の入学が許可された。十三歳で哲学博士という称号をもらい、十六歳で法学博士となり、ベルリン大学の教授にもなったといえます。これは才能教育をして成功した例ですが、天才教育の世界的な例として、すでに古くからいわれていたのであります。

ところが一方では、意外に、世界的な偉人といわれている人の中に、小さいころにたいしてそういう教育をうけなかったところか、ほとんど先生からも認められず、こんな子はとてもしようがないというふうに見られていた例がたくさんあります。才能教育をうけたところか、こんな子にはやっとならなうがなうといわれた人たちです。

たとえばベートーベンなどの場合、彼は幼児のころ、先生のアルブレヒト・ベルガーという人から、どんなに仕込んでもとても作曲家になることはできない、などといわれたのです。ニュートンも、初級クラスでは、成績は最下位だった。落ち着きのない、不勉強な生徒だといわれていた。ダーヴィンも同じですね。先生

からも親からも、この子は並の子だ、いや並よりちょっと低い子じゃないかと思われていた。

最近では、例のウインストン・チャーチルは、バブリックスクールのハーローに入学する時に、ラテン語の答案は文字が書いてなく、ただしみしかついでいかなかった。とてもそんな成績では入学できないのですが、校長先生の特別の配慮で入学が許可された。最低の成績でハーローに入学し、五カ年間というものは、ほとんど成績は上がらなかった。スポーツなどもへたで、さっぱり目立たなかった。しかし、ときどき妙なことでえらく頭角をあらわし、たとえば、マコーレーの「古代ローマの歌」という千二百行の詩の暗唱の時には、全校一の成績を示した。そういうムラはありましたけれど、要するに、小さい時から立派な教育をうけて、その結果、頭角をあらわしていたという例でもないですね。

そんなような例は非常にたくさんありまして、たとえばナポレオンは、世界第一の偉人ですが、この人は、よく、字を書くことつづりを間違えたというのです。しかも字がへたでした。うれにすごく無器用で、石を投げても思った方向にとばなかった。また、よく彼が馬に乗ってさっそうと走っている姿が映画など出てきますが、実際は乗馬も不得手でした。このように文字がうまく書けなかったり、運動能力が悪いということは、かるい脳障害の特長ですが、事実彼は、てんかんをもっていた。にもかかわ

らず、世界第一の偉人とされています。

知能の発達過程

運動機能

このようにいろいろの例にもあるように、単に才能教育というものがある、天才を生む条件になるかどうかはわからないし、また効果的であるとはいきけません。しかし、事実として幼児期にのびる能力というのがあります。幼児期には、運動能力が急速に発達します。ですから、この時期にたとえば数学なんかを教えただけで、それは本当の才能教育にはならないですね。

運動能力が、知能の発達の一基礎になります。第一は感覚運動機能——あるいは知覚運動機能とでもいいですか、そういうふうな面が、まず知能の最初のものである。ピアジェなどの新しい知能の考え方では、やはりそういう点を強調しています。

これは、運動というと、ただ筋肉の動きのように思うかもしれませんが、視覚、目でコントロールされる運動になるわけです。敏しょうに行動するというようなことは、ただ筋肉だけの問題ではなく、むしろ、目が歩哨の役として行なう運動調節の問題、そういうような運動機能などが、まず知能のもとになります。全身の運動、一定の目標に向かって全身の運動で反応する。たとえば、獲物に向かってとびつく。ネコは小さな時からネズミをとっ

てくる。人間がそういうような正確な運動をすることは、とても三歳や四歳の子どもではできない。もし、幼稚園などで運動機能の訓練をしている時に、ネコやサルが參觀に来たら、とてもわれわれははずかしくてやっけていられないと思うんですね。彼ら動物たちのほうが、よっぽどうまいから。

鬮牛の牛が、あの赤い布に向かって突進する時のねらいは決して間違っていない。牛の動きは正確で、きわめて敏しょうである。ただ彼は、本当の敵は赤い布の後ろにいるんじゃない、その横のほうにいるんだということが、わからないわけです。そういうことは、いわゆる大脳の働きが判断する。したがって人間ならば、あそこにある赤い布をねらったらいけないんだ、あの端のほうをねらえ、というように修正をしようと思ふんですね。そうすると鬮牛士はたちまち殺されてしまいますが、牛にはそういう大脳を通しての反応がないわけです。だからいつもおろかな反応をしているようですが、しかし、あの動作は実に敏しょうです。人間は幸か不幸か、大脳が発達したために、実に単純な反応はかえって敏しょうでなくなつた感じですよ。

こんなわけで、人間の子どもというのは、全身の運動はどうも無器用です。しかしまた、同じ運動でも、指の運動というのは、大脳の運動領域の部分が発達し、成熟しないと十分できないらしい。たとえば、指を一つずつ数えるように折ってみる、というよ

うなことを子どもにさせても、三歳児ですとなかなかむずかしくて、できる子もいるが、できない子のほうが多いですね。

動物園に行つてサルのオリのをぞく場合、サルのあの敏しょうな動作をみて感心するより、むしろ、サルに向かって指を折つたりしてみせるとよい。そうしたらきつと、人間でなんて器用なんだろう、自分たちにはとてもあんなまねはできないなんて思つて、ソッポを向くかもしれない。こういうことは意外にむずかしいことです。

さらに、指で一つとびにたたいたり、あともどりしたり、一定の速さでいろいろなところを押すというようなこと、たとえばピアノを弾くという動作は、大脳の発達とも関係があり、かなりむずかしいことで、動物にはとてもできない。サルは、物をつかむかはなすかしても、ピアノを弾くときのような動作はできない。そして、こういうものがどうやら自由にこなせるためには、人間でもおそらく十歳ぐらいまではかかると思ふ。かなり高度の訓練を必要とする基礎的な能力です。またあるいは、筆を持って、それも筆をつかんでじゃなくて、何本かの指で筆を持ち、一定の方向に、力の加減をしながら動かして字を書いたり、形を描くということはむずかしく、五、六歳の子どもで、やつと四角形や菱形が描ける程度です。

ですから、そういう、運動機能の訓練というようなことを、ま

ず最初に、いわゆる知能の訓練の前になければならないのである。精薄者の治療の場合、特に言語障害をもった子どもの治療の場合、昔は、いきなり、どうして声に出せるかとか、音を聞かせるかという訓練をしたのですが、このごろは、その前にすることがある。平均台の上をよく歩かせるとか、あるいは、手や指の運動のような、運動機能の訓練をまずさせなければいけない。いわゆる教育以前の訓練です。そういう子どもは、こうした点に障害があつて、その先ができません。したがつて、ここから訓練をやらなければいけないというようなことがいわれます。ですから、幼児期における才能教育としては、指の訓練から始まるといつてもいかもしれないし、先ほどもいいましたように、字や絵のようなものを書いたり、あるいは、ピアノを弾くということの重要性が、あらためて考えられてくるのであります。

知能（言葉・音楽的才能）

この指の訓練にくらべて、言葉のほうは、むしろ先になりまゝです。言葉は、むずかしいように思いますが、実はそうではなくて、言葉を聞いたりしゃべったりということは意外にやさしいことなのです。

十ヵ月ごろから言葉を言い始め、その後約三年間学習し、四歳児になりますと、もうどの子も実によくしゃべっています。親の

いうことも先生のいうこともよくわかるし、自分たちの生活に関連して意志の表現が自由にできる。なにも幼稚園に入つてはじめて言葉をならうんじゃない。あるいは、発表の仕方ならうわけではない。なかには、家ではしゃべれるけれど、幼稚園ではしゃべれない子もいますが、ともかく、家庭の中ならば、子どもは自由になしゃべっている。むろん理解もしている。十ヵ月から始めて三ヵ年ぐらいの教育で、言語の発達は一応でき上がつています。だから言葉は、指の訓練よりやさしいといえるかもしれない。

言葉は、いつ教えるかという点、十ヵ月から三歳ごろまでの間に教える。それで十分おぼえていくわけです。しかし、実際には、いつ、だれが、どのようにして教えていくかという点、これは一定の授業時間内ではなく、一日中、機会あるごとに、だれかが、親が、別にカリキュラムがあるわけではないが、個別的な子どもへの語りかけによって教えています。

子どものそばに、言語的なバック・ミュージックとして言語が流れておれば、子どもはしぜんに言葉を覚えるか、というところではない。

赤ちゃんのうちはどうしようもないが、十ヵ月ぐらゐになつて「ウマウマ」なんていうのがわかるようになると、おかあさんは必ず子どもにむかつてこの言葉を中心にして、「さあ、ウマウマ

ができましたよ」とか、「ウマウマ好きでしょ」というように「ウマウマ」という言葉がくりかえされる。そういうことから言葉を感じる。

子供の理解に応じて、一つの言葉を中心にして教えていく。母と子がマン・ツリー・マン方式、一対一の形で、そして子どもにわかることを中心にして教えていく。これが、子どもが言葉を感じる条件です。もし、そのような一対一の人がいなければ、言葉の発達はおくれまします。

この場合に、ただ偶然にいろんなことを教えるよりも、すこし計画的に、いろいろな物の名前、野菜の名前、さかなの名前などを教えれば、もっとよいかもしれない。まあ、そこまでしなくてもいいですけれど、したらもっとよく才能教育らしくなるかとも思うのです。

本来、母国語というものは放っておいても覚えるから、なにも無理して教育的に考えなくてもいい。むしろ、教育的に考えるならば、この際、外国語をひとつ入れたらどうだろうか。英語を四歳ごろから入れる。二、三歳から入れたって悪くはないのですが、一応ある程度日本語がわかった時に、しかも、固定化しない時に、外国語を教える。日本語を完全にマスターしてしまって、中学生になってから教えたってだめで、子供の能率はあがらない。まだ日本語が完全でないようなところに、もう一つ外国語を教

えますと、子どもは二つの言葉を同時に覚えてしまいます。二重言語ですね。そういうことになれば、それはたいして子どもに負担にならずに、しかもすばらしい効果をみる事ができる。二重言語がいいか悪いか、いろいろ問題になるのですが、将来、日本人のものの考え方に幅をもたせらうとすれば、やはり国際語を一つマスターしなければならぬというならば、むしろこの時期にやったほうがいいということが考えられます。

言葉を覚えるためには、大脳の側頭葉に聴覚の中枢があり、言語中枢は、普通の人ならば左のほうにかたまってくる。この言語中枢が左側にかたまってくるかどうかということが、言語の発達に非常に関係があるといわれています。これが十分きまっていなると子どもはどもりになるといわれます。

言語の中枢が左の側頭葉に定着してくると、右の方はリズムを理解したり、メロディーを聞いたたり、というような音楽的なものの中核になるといわれています。言語が三、四歳までに非常に発達するので、このころに音楽的才能もまた発達します。もしその時に音楽的なものをどどんと教えていくと、言葉と音楽才能がうまく発達していく。すくなくとも幼児のこの早い時期に音楽を教えたために、負担過剰になるといことはないらしい。

このようなわけで、言語ならびに音楽の教育というものは、二歳ごろから、三歳、四歳のあたりにやるのがよいと感じられます。

す。

少し例が悪いかもしれませんが、知恵の遅れた精薄児は、普通の文化財に対しては一向に反応しません。絵本を見せても喜ばない。お話をしてもあまりよくわからない。ところが音楽だけはふしぎにわかるらしい。テレビで音楽をやると、彼らはいろいろな動作をしながら喜んで見る。精薄児でも音楽はわかるのです。したがって音楽がわかる知能というのは、精神年齢でいえば、二歳、三歳というところで十分なのです。

ともかくこの時期の子供に一番よくわかる芸術は何かといえ、それは音楽なのです。ですから早い時期に、ちようど言葉を聞きかけると同じように、幼児に、メロディーを聞きわけさせたり、音の調和、ハーモニーなども、正確に教えこむ、ということが大事なことです。こういうことこそ、ほんとうの才能教育ではないかと、私は思っている次第であります。

長いことありがとうございました。

(青山学院大学)



日本保育学会第二十四回大会

会場 東京家政大学

期日 五月十五日(土)

十六日(日)

記念講演(十五日)

西独キリスト教保育連盟指導主事
エリザベート・シュブランガー氏

続・遊び場の本質的価値

塩川 寿平



五月号において、遊び場について一、心理学的考察を行なったわけであるが、今回は続けていくつかの考察を加え、遊び場の本質的価値を解明し、認識を深めたい。

二、社会学的考察

(1) 社会性を身につける場

子どもの社会性の発達にとつて、ギャング時代 (Gang Age) は大切な時期であるが、ハーロック (Elizabeth B. Hurlock) は、

「二〜六歳は前ギャング期とよばれる。この時期において、子どもは明らかに社会化されてくる。集団活動を始め、遊び仲間との同一化が進み、社会関係を認知し、他人の地位と自己の地位とを比較し、遊びの役割も分担できるようになる。やがて他人の行為の標準によって自己を批判したり、自己の好悪によって他人の

行動を批判し始める。

次に六〜十二歳は、通常ギャング時代とよばれている。この時期において、子どもは家族の世界から、仲間集団の世界へと興味の焦点を移行する。社会的意識は急速に発達し、その興味の中心は集団活動である。集団に忠実であるということが最も重要なこととなり、集団のモラルが強調される。成人支配に対抗して仲間だけの生活に没頭する。その集団生活における相互の承認と不承認が、敏感に彼等の行為を左右する。」(注①)と述べている。

すなわち、遊び場は子どもたちの集合する場所であり、遊び仲間を与えてくれる。そこで子どもたちは、ギャング時代をすぎ人間関係を学び社会性を身につけていくのである。今日の遊び場不足は、このような子どもたちの生活を困難なものにしている。ゆえに、われわれは積極的に遊び場作りを進め、子どもたちの集

団活動を、健全な場で保障していかなければならない。さもないと、子どもたちを歓楽街へと追いやる結果になるだろう。

遊び場とは、集団活動を可能にし、子どもたちの社会性をはぐくむ価値をもっている。これは、一般の遊び場についても、また保育所・幼稚園の遊び場についても同様にいえることである。

(2) 民主的精神を身につける場

(1)で述べたギャング時代を通して、社会性が高められるなかで、子どもたちは民主的ルールを学ぶ。それは単純な遊びに始まって、一定の技術を必要とするスポーツなどを通して、平等の精神や協力の精神を自らのほだで学んでいくことである。

このことは、成人になった時、「民主的な社会建設のにない手となる」基礎をつくるものである。もちろんこのことについては、遊び場のみで行なわれることではない。しかし、自由な意思による遊びを通して、同年齢の仲間と共に学んでいくことは、他では学ぶことのできない価値があるといえる。

(3) 責任と愛情を育てる場（情操を育てる場）

遊び場は、ただ走ったりとんだりするところではない。遊び場には花壇や植木がある。遊び場には、ハトやウサギや金魚やカメを飼っている場所がある。子どもたちは、自然に手をふれ、その



子イヌと遊ぶ

生きた姿を学ぶ。花を植え、育てる。小動物たちの世話を自分の手でやってみる。そうした中で豊かなパーソナリティは育てられていく。花の美しさ、小動物のかわいらしさに感動した時、愛することを学んでいく。また、草花を枯らしてしまわないように水をやり、小動物を飢えさせないように世話をやく。そうした中で、本当の責任というものを体験し、身につけていく。

時には、えさをやり忘れ、小鳥を死なせてしまうことがあるだろう。また、時には、池のコイの死をみつめるかもしれない。その時こそ、子どもたちは生命について真実を知る。かわいがっていただけに、その悲しみは大きい。だが、一度死んだものは再び

生きかえることはないのだ。子どもたちは愛と責任の間で苦しむであろう。生きとし生けるものの真の姿を知った時、本当の生命のとうとさを知る。それはやがてヒューマニズムに育ち、平和を求めるとな育つであろう。

さらにまた重大なことは、草花を栽培することを通して、遊び場（保育所・幼稚園）を大切に育つ心というのである。

子どもの手で植えた花が育つことは、子どもたちに自分の遊び場感を深めさせる。美しく咲いた花を大切に育つ心は、そのまま遊び場を愛し、大切に育つ心につながる。

ぼくらの遊び場だという意識が育つ時、そこで本当の生活が営まれているといえるだろう。「ぼくらの遊び場にはぼくの花があるんだ。ヒマワリにぼくの名前がついているんだ。だって種をまいたのも、水をやったのもぼくなんだもの」と子どもたちはいう。遊び場の木を折ってはいけない！ 遊具をこわしてはいけない！ としかるだけではない。遊び場を愛する心を育てること、自ら遊び場作りに参加することであり、遊び場はすばらしい」という実感を体験する以外には成り立たない。

三、体育・保健学的考察

(1) 病的児追放の場（健康維持の場）

子どもの健全な発育・成長を支持する場として、遊び場は考え

られる。今日、肥満児およびもやしっ子の増加が、一つの社会問題となつているが、明らかに運動不足であり、その遠因として遊び場の不備があげられる。身体の成長は、バランスのとれた成長が望ましく、単に量的に増大することだけがよいのではない。それゆえに、遊び場の本質的価値として、「身体の健全な成長を援助する場」であるといふことができる。なおこのような機能をもつ遊び場とは、遊びを一定の型に定めることのない、全身的な運動につながる遊び場である。

(2) 体力鍛練の場

これは(1)で述べた身体の健全な成長を援助する場という意味よりも、さらに積極的に子どもの体力を鍛練する場として、遊び場をとらえたものである。今日の都市化現象の中で、子どもの生活はどうしても室内となり、鍛えられた身体の発達を望むことはできない。どうしても握力・走力・瞬発力などの体力を遊びの中で積極的に育てていくことが必要である。

以上、体育・保健学的な価値を述べたわけであるが、同時に保育六領域の「健康」の指導も行なわれる。

四、精神医学的考察

(1) 精神的充実を得る場

T、N、両保育所の運動会の臨床観察より考察する。もちろん運動会という一つの行事によって、すべてが語れるものではないが、日々の保育の集約として考えた時、やはり一つの結果が見られる。なぜならば、日々の保育において、運動会プログラムは練習されているのであるから、その精神的充実度というものが、子どものパーソナリティ形成上に与える影響は大きい。運動会という日を頂点として、その前日までの保育が何であったかが本来的に問われてくるのである。

第1表にT、N、両園（四月号参照）の運動会の状況をしるすが、両運動会の観察点は、狭い遊び場と広い遊び場の環境条件の差が、どのように影響するかという点である。

まず、T園の子どもからは、全力疾走、及び全力投入の綱引き、なわとびの場面がみられず、また相手に負けても勝つてもくやしがる姿が見られなかった。応援にも熱が入っていなかった。全力を出して戦ったという満足感がないので、心から喜んでいない。

それに対し、N園の子どもたちからは、一人一人の園児が闘志をむき出しにして競っている場面が多く見られた。ひたむきになる場面は応援にもみられ、心から「ヨッチャんがんばれ!」という友の名を呼ぶ声援となって現われていた。また、競技において友にぬかれまいとする心、友をぬこうとする心の激しさは、自己

第 1 表 T、N 保 育 所 の 運 動 会

園 名	屋外保育 施設面積	定 員		運 動 会 の 状 況
		定員	実在数	
T. 実施 S. 44. 10.15 (水)	180m ²	70	85	自分の園で実施。午前中のみ3時間。平日。特に父母の参加を呼びかけない。リズム遊戯、玉入れ、障害物を加えた競走（カメさん競走、玉ころがし等）。全力で走るとは全くなかった。条件として狭くてできない。
N. 実施 S. 44. 10.10 体育の日	6600m ²	90	120	自分の園で実施。午前中3時間午後2時間。祭日。父母の参加を呼びかける。全力疾走、全力投入の綱引き、マット競技を中心にリズム遊戯、玉入れ等、力の限りに競う場面が多くみられた。

の能力の限界に挑戦する姿である。それは自己の能力を正しく知ることであり、精神的な自信となる。その自信とは、自分を知っているという安定感である。また、自己の能力の限界を出しきった喜びは、満足となつて現われ、欲求不満を解消させる。自信と満足を獲得することは、精神的充実をもたらし、そこに豊かなパーソナリティが育つといえる。

それゆえ、自己の能力の限界に挑戦する「ひたむきな姿」を運動会の中に見いだすことは重要である。自己を出しきらない競技からは、心からの喜びも悲しみもない。そこに自己のかかわりを見いださないからである。そのためにパーソナリティの発達上、甘さがみられ本当の進歩がない。いいかえるならば、何としても勝とうとする打ち込む姿、そのひたむきな激しさ（強さ）を知らない子どもたちに、真の友情（暖かさ）は生まれぬ。全力で戦った後にくるものは、勝負をこえて自己の健闘を認めることであり、相手の健闘をたたえることである。

それは個人競技に限らず、団体競技においても同じである。人はこの「強さ」と「暖かさ」という矛盾しがちな価値の中で成長する。その機会はスポーツというフェアな戦いの中にある。それゆえ、全力疾走、全力投球の可能な広い遊び場が、特に保育所や幼稚園には用意されるべきである。また、自己のもつ力を出しきった、日々の生活することは、弊害現象で上げられた情緒不安

定から起こる諸現象を解消する。

(2) 治療保育を行なう場

保育所・幼稚園には、いろいろの問題をもつた子どもが入所してくる。特に、軽い情緒不安定や、軽い精薄（知能の遅れ）、また自閉的傾向の子どもである。

広い遊び場は、対人関係や対物関係において、必要以上の緊張状態をつくらぬ。また、自由な活動を許し、最も自然な感情表現を完結させる。それゆえに、精神の安定をもたらし、治療効果を上げる。たとえば、どんこ遊びなどそのよい例である。子どもたちはどんこの中に自分の感情をたたくつけ、自分の心を整理していく。すなわち、遊び場の本質的価値として、治療効果が上げられる。また、この価値については、「自己主張の場」「精神発達受容の場」と密接に関連する。

五、大脳生理学的考察

(1) 大筋運動による髄鞘発達の場合

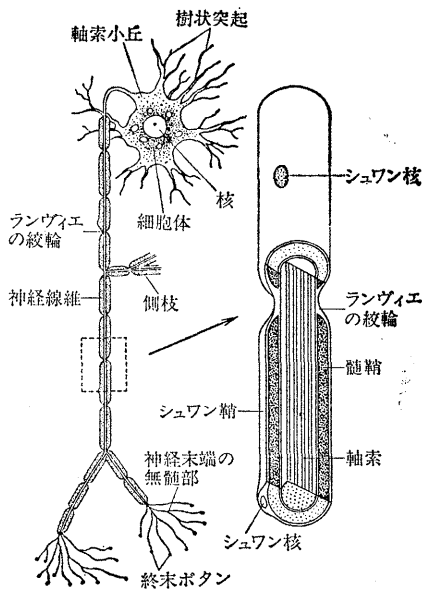
我々は神経系の支配を受けて、筋肉を動かしているのである。神経は感覚器で受け入れた外界の刺激や、身体の内部で起こった刺激を中枢に導入し、これに反応して起こった中枢の興奮を末梢に伝えて、筋の収縮を行なっているのである。それゆえ、神経系

の発達がスムーズにしているならば、運動もスムーズに行なえるわけである。精神薄弱児等の運動には、バランス、タイミング、リズム等に欠ける点がみられるが、原因は神経系、すなわち脳の働きにあるといわれる。

そこで、逆説的に考えるならば、筋運動を意図的に行なうことにより、神経系の機能発達をひき出せないかということがでてくる。すなわち、運動することにより、脳の働きを促進させようというのである。

時実利彦は、

「生まれた時の脳細胞は、数だけはおとなの脳細胞と同じである



が(約百四十億)、まだ働いていない。成長するにしたがって、たくさん樹状突起をのばして、まわりの脳細胞とからみ合い、また、神経線維に髄鞘ができて、はじめて脳細胞が働き出すのである。」(注②)と述べている。

ここで重要なことは、髄鞘についてである。髄鞘の働きは、神経の伝導をよくし、脳細胞の働きをよくすることにあるが、今日の大脳生理学が明らかにしたところによると、髄鞘の成長を促進するには、大筋運動が最も効果があるということである。そして、なによりも大切なことは、乳幼児の心身の発達は、大脳の発達が先なのではなく、まず肉体的な発育刺激が先なのであり、その結果として大脳は発達するのである。それゆえに、遊び場は、大筋運動の場を保障し、脳の働きを高める価値があるといえる。なお、神経線維に髄鞘ができていく状況は、脳の部位によって非常に違う。

基本的生命活動を営むために、必要な働きをする脳幹や、小脳は早くでき上がる。大脳皮質はおそく、その中でも場所によって髄鞘化の時期が違う。運動や感覚をつかさどる場所の方が早く髄鞘ができる。次いで、高等な精神がいとままれる連合野の髄鞘ができる。特に前頭葉と側頭葉は一番おそく、一生かかるといわれる。そこで、この発達過程を考慮に入れるならば、乳幼児のうちにはまず、運動や感覚をつかさどる場所の髄鞘化を考えるべき

で、戸外の遊び場で遊ぶことがそのためにも大切である。

六、社会問題からの考察（安全能力開発）

社会問題の防衛対策として遊び場を考察する場合、注意しておかなければならない点は、たとえ満足のいくような施設がとどったとしても、交通事故及び水難事故という社会問題が皆無になるものではないという点である。なぜならば、その主因が遊び場のあり方にあるとすべきすじのものではないからである。だが悲しいことではあるが、『交通戦争』とまで呼ばれる、現実のあまりにも激しい事故攻勢に対して、消極的な対決ではあるが、子どもがわからぬ防衛にとり組まなければならない。なぜ以上の説明を付したかについては、今日これらの社会問題に対して、防衛能力さえ養えば解決されると考え、子どもの訓練に過大な期待をかけ、社会問題の根本的な原因に対する追求を見落とす、一部の論者がみられるからである。

(1) 交通戦争に対する防衛の場

遊び場を設置することによって、路上遊戯などをなくし、子どもを交通事故から守る。また保育所や幼稚園においては、遊び場に交通信号等をつけ、日ごろの遊びの中で交通知識を学ばせる。さらに、各種のグランド運動や遊具運動を通して、子どもの敏捷

第2表 保育園用年齢別プール
野中保育園(富士宮市)

	対象年齢	広 縦 横	水の深さ
1	1～2歳用のプール	2×2m	20cm
2	3～4歳用のプール	2×3m	50cm
3	5～6歳用のプール	4×8m	80～100cm

性・平衡性・瞬発力・持久力などを養い、身の危険をさける訓練をする。

以上消極的な対策ではあるが、交通戦争に対する防衛及び安全能力を養う価値があるといえる。

(2) 水難事故に対する安全能力開発の場

子どもは水の恐しさを知らない。だが、水の魅力は大きい。そして、いたるところに川、池、用水、どぶがある。その結果が水難事故となつてあらわれてくる。保育所・幼稚園においては、子どもに対して水に対する正しい知識と安全に対する訓練をしなければならぬ。その最もよい方法は、プールとシャワーである。夏のカリキュラムの一大行事は水のプログラムだといえる。それは楽しいプログラムである。夏の暑い太陽の下で遊びながら、水に対する知識と安全能力が養われていくのである。子どもたちに言葉の概念で水の恐ろしさを教えることはまず不可能である。一番効果的なのは、実際に水に入り、体験することであ

る。それは必要以上に水を恐れていた子に対しても、よい結果を生む。それゆえ、乳幼児の発達に合わせて、第2表のような種類のプールをもつことが望ましい。

野中保育園（静岡県富士宮市）においては、第2表の三種類のプールをもつことにより、年齢に合った指導が行なわれ、よい結果を得ている。また特記すれば、同園では、昭和四十五年の夏の場合、スパルタ的な方法ではなく、自然の発達の中で、年長児五十名中四十五名が四メートルを泳ぎ、さらに二十五名が八メートルを泳ぐという結果を生んでいる。

以上、遊び場は、水難事故に対する知識と安全能力を身体で体験し、認識する価値をもつといえる。

七、その他の考察

今まで論じてきた中で、すでに保育六領域の①健康②社会③自然④言語についてふれてきたが、ここでは⑤音楽⑥造形についてふれることにする。

まず「音楽」については、リズム遊戯や鼓笛隊のカリキュラムは、室内で行なわれるよりも、戸外の遊び場で行なわれる場合が多い。

次に「造形」についても、戸外で行なう保育効果は非常に高いものがある。太陽の下でキャンパスに向かうこと、青空の下で造

形活動をするのは、子どもたちの心を自由にし、創造性を十分に發揮させる。また戸外の自然は、土、砂、木、水という素材を豊かに提供し、同時に造形活動のスペースを保障しているのである。すなわち、遊び場は、保育六領域のすべてにわたってかかわっているといえる。

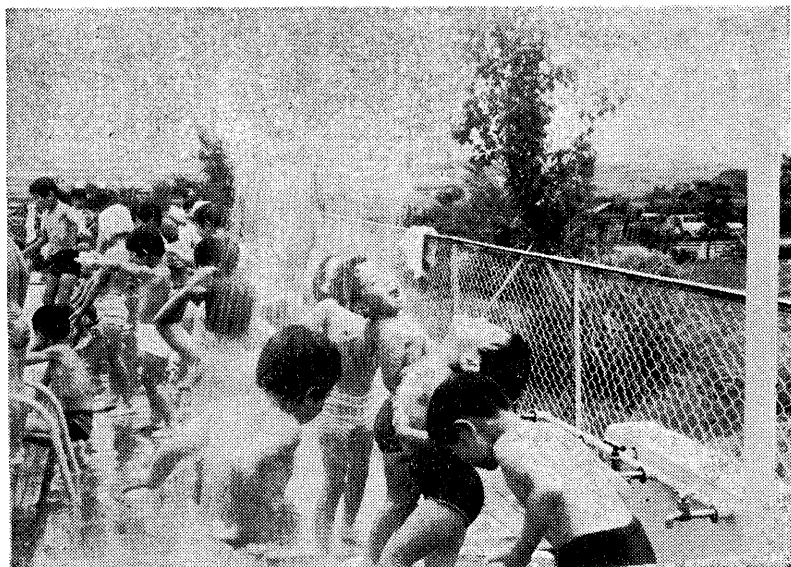
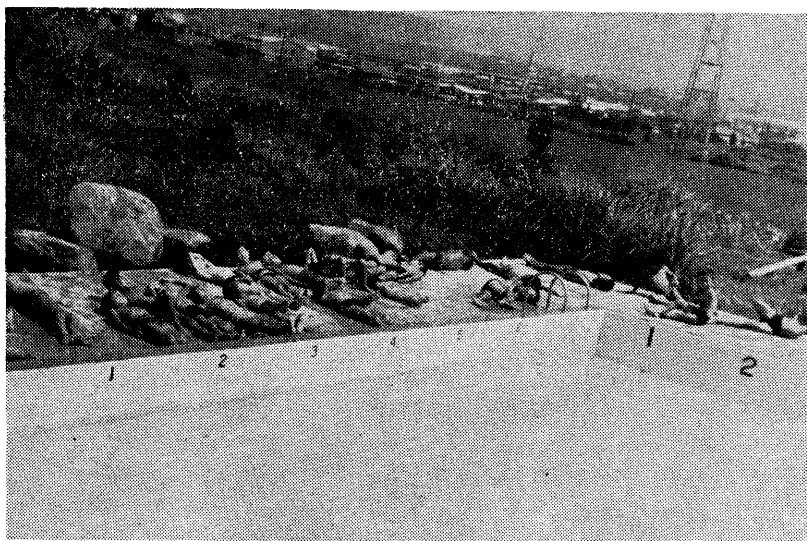
以上七節をもって、「遊び場の本質的価値」の考察を終わる。

これらの本質的価値を正しく認識するならば、あまりにも貧しい遊び場の現状に甘んずるわけにはいかない。今こそ我々は、この認識に立って豊かな遊び場づくりを強力に進めていかなければならない。

(つづく)

(参考資料)

- (1) 田中熊次郎「児童集団心理学」明治図書
- (2) 時実利彦「脳の話」岩波新書



子ども の 文化 (その三)

— 児童文化にかかわる子どもの役割 —

本 田 和 子

◆文化の共有者、子どもとおとな

子どもは、おとなの生産になる文化財を受け入れるだけの存在ではなく、おとなによって伝えられる文化価値をただ受容するだけの存在でもない。それどころか、児童文化の形成に關しては、むしろ作り手としての主要な役割をなっていた。

伝承童話が形成され、伝承される過程をたどってみても、あるいは、玩具が市場に現われるまでの経過をみても、子どもは、子どもが果たしてきた役割の大きさに、あらためて驚かされるのである。まだ児童文化という概念が形成されず、児童文化財の生産が産業機構の中に入りこんでこなかった古い時代には、子どもは自らの手で自らの文化を作り出していたのであった。

ところで、「自らの手で自らの文化を」という表現は必ずしも

正確ではない。というのは、「児童文化」という概念を成立させて子どもの文化を特別のものと考え以前には、子どもとおとなは文化の共有者であったからである。共有する文化の中に、子ども自らが「自らのもの」と感じる部分があったことは確かであろうし、大人のがわで「あれは子どものもの」ととらえることがあつたに違いない。しかし、全体として、文化は共有されていたのであつた。

次に、興味深い一つの物語、ローズマリ・サトクリフによる「太陽の戦士」を例に引きながら、考えてみることにする。

——ドレムの心のなかには、奇妙なことが起こりつつあつた。ドレムが子犬の小さな胸の下に手を入れてすくい上げると、四本の足がドレムの手首のあたりにたれさがつた。その子犬もほかのき

ようだいたちのように、やっぱりネズミみたいだった。まだしめ
っている毛皮はネズミの皮のようにやわらかで腹はもも色をして
いた。毛足はまだ短くて、ほとんどはだか同然だった。ドレムの
手のひらに新しい生命が脈打っているのが、感じられた。この子
犬の胸とのどには、もう小さな銀色の炎のような白いブチがみえ
ていた。子犬はなき声をたてた。そのやわらかな鼻づらが、あた
たかい母犬の乳をもとめて、ドレムの手をつつきまさぐった。ド
レムはそれを愛情のこもったまなざしで眺めた。この子犬にすっ
かり心をうばわれてしまったドレムは、それを手に入れたいと願
う気持ちでいっぱいになっていた。――

ローズマリ・サトクリフは一九五〇年以降、現在に至るまで英
国における現役の児童文学作家として活躍している女性であり、
特に「過去の人々の生活を再現すること」をねらいとして、歴史
小説にすぐれた筆をふるっている。この作品は青銅時代のブリテ
ンを舞台として、片腕の少年ドレムを主人公とする物語である。
肉体的に障害をもつ子どもが、それを克服し、部族社会の中に自
分の地位を獲得していく過程が、巧みな物語構成の中に、いきい
きと描かれている。

ところで、さきに引用したのは、主人公ドレム少年が、尊敬す
る片腕の戦士タロアの家に生まれた子犬に対して、はなれ難い愛

着を感じ、胸をしめつけられる思いでその子犬を熱望する場面
である。この子犬は、優秀な獵犬ファンンドを母とし、野生の狼を父
として生まれている。この部族の獵人たちは、ファンンドの子犬な
らどんな取り引きにも応じるというくらい、価値の高い子犬なの
である。

しかし、老戦士タロアは、その子犬を九歳の少年ドレムに売っ
てもよい、と申し出る。ただし、その値はドレムが自分の投げ槍
でしとめた鳥一羽ということであった。つまり、片腕のゆえに、
弓を引くことのできない少年にとって、投げ槍に熟達すること
が、唯一の戦士として生きる道であった。タロアは、ドレムに、
その腕前を示すことを要求したのである。

ドレムは、翌日、一羽の美しい白鳥をしとめた。少年にとって
最初の獲物、あまりにも大きくて、子どもの手では運ぶこともで
きないその鳥は、限りなく美しく輝いてみえる。

――ドレムは鳥をつかむと、トネリコの本のところまでひっぱっ
ていった。かなりの時間がかかった。本能的にドレムは白鳥をい
ためまいとつとめていたからだ。それはドレムの獲物だったし、
今となつては動かぬ美しさではあったが、まだ美しかったから。
ドレムは鳥をタロアに見せるまでは、その美しさをたもたせてお
きたかったのだ。少しずつ少しずつきざられるたびに、草の上

であおられてひろがる大きなつばさを、ドレムはもとどおりにした。とうとう白鳥はトネリコやイグサ、野生のアヤメがしげるなかにおかれた。

しげみの奥深く鳥をひきずりこむと、ドレムはできるだけ場所をとらないように、大きなつばさをたたんだ。それから花の咲いている茶色のイグサや、刃のようなかたちをしたつめたいアヤメの葉をひとかかえほどもひきぬいてきて、白鳥の上に厚くかぶせた。こうしておけば、カササギやカラスに、白いつばさのかがやきがみえないだろう。――

しかし、こうした勝利感はずぐにゆらぎ、不安におちいる。それは、タロアの家に部族の有力者が新しい銅鍋を持って、子犬と交換してほしいとやってくる。そして、その有力者はドレムの獲物を一笑に付したのであった。

しかし、タロアは少年との約束を守り、「片手の指の数ほどの銅鍋よりも、この白鳥こそ子犬の値にふさわしい」といつてくれる。ドレムは、より激しく、より甘美な勝利感に目もくらむ思いで子犬を連れて帰るのである。

――そうしてドレムは、白亜の斜面を家のほうへのぼっていった。獵犬をだき、まだ夏のけはいのこっている暗闇を歩いてい

った。子犬はあたたかく、たしかに生きていて、思いがけず重かった。勝利の歌があとからあとから自然にわき出てきた。

「獵犬を買ったんだぞ！大きな白鳥で――じぶんの投げた槍でやつけたんだ！獵犬を買ったぞ！おれのだ。オオカミの血がまじってるんだ。こいつは部族のなかでいちばん足ばやでいちばん強い獵犬になる。そいつがおれの犬なんだ！だっておれはちゃんと値段だけのものを払ったんだから――このおれがだ。獵人のドレムが――じぶんのしとめたえもんでな！」――

物語は、この後、十二歳から十五歳までを、家をはなれて「若ものの家」で戦士となるための訓練を受けるドレムを描き、さまざまな試練を経て、「狼殺し」に失敗して一度は部族から追放されるという苦難にも会いながら、十六歳で成人式に連なり一人前の男性として、部族社会に迎えられるところで終わっている。

作品の読者は、小学校の上級から中学生くらいの男女であろうか。したがって、幼児とは直接には関係のない文学である。この物語を長々と引用したのは、何よりも、描かれている「子どもの生活」が興味深かったからである。

この作品は、私どもに「子どもが生きる」ということを、しかも「真剣に生きる」ということを、きわめて典型的な形で示してくれている。読者を魅了し、感動させるのは、まさしく、物語の

中で少年が真剣に生の戦いを戦いつつ成長していく過程である。このように幼年期から青年期にかけて成長していく人間を追求することは、十八世紀以来の英文学の主要なテーマの一つである。確かに、多くの作家がさまざまな作品でそれを試みてきた。おそらくは、そこに最も凝縮された形での「生の営み」がみられるからであり、理想的で典型的な形の「人間」が見出せるからであろう。

この作品は、青銅時代のブリテンという荒々しい風土の中で、征服者部族の男子は「狼殺し」の課題を果たすことによって、一人前の戦士として部族社会への参加が許され、それに失敗すれば、被征服者の仲間に入って羊飼いとして暮さねばならないという、きびしい社会的秩序の下に、主人公を生活させる。そして、その主人公の生きぬこうとする努力が、痛いまでに読者の胸にせまってくるのである。

物語の中で、少年は、必要なものを手に入れるために自ら投げ槍を投じて、獲物をしとめている。そして、少年が手に入れたのは、現在の瞬間的欲望を満足させるためだけの玩具ではなく、生涯の獵の伴侶たる一匹の子犬であった。しかし、子犬を得たことは、少年にとって、将来のための単なる準備ではない。それは、現在の満足と、現在の生の充実に連なるものであり、たとえようもない歓喜なのである。それでいて、少年が、現在の瞬間を楽し

んでいることは、将来の生をより確かにすることと同一なのである。

この物語の世界では、子どもとおとなを区切る明確な線が、「狼殺し」と「成人式」という形で引かれている。しかし、このような社会的な儀式が必要なほど、子どもの成長の過程は、単純でまっすぐなおとなへの道であった。子ども時代というのが、囲われた特別の部分ではなく、子どもの世界とおとなの世界とは対立する二つのものではなかった。文化のまだ開けない社会にあって、子どももおとなも、まさしく、真剣に素材に、共に生を営んでいたのである。

そして、ここには、同じ文化の共有者としての、子どもとおとなが存在している。狩獵、特に狼を殺すことが価値ある行為であり、太陽神への帰依が部族の信仰であり、緋色のマントが戦士の象徴であるような、同じ文化を子どももおとなも呼吸している。

もちろん、これは物語であって、ドレムをめぐるさまざまなことからは、作品の上の事件にすぎない。しかし、おそらくは、近代以前の社会、特に歴史をさかのぼればさかのぼるほど、子どもの生活と文化はこのような次元に成立していたのではないか。

子どもの生活を、「基本的な生活・労働・学習・遊び」の四つからとらえようとする立場がある。そして、労働の占める割合いが減って、逆に学習と遊びにあてられる時間が増大することが、

子どもの生活の近代化だとするのである。確かに、学校教育制度の普及した近代以降の社会では、子どもたちの労働にさく時間は減少し、純粹に学習のために費やす時間が増大している。子どもたちは、弟妹の守りをしたり、羊を追ったりして、一日を過ごすことはなくなつたし、ましてや、工場労働などに幼い肉体をすり減らすこともない。そして、子どもたちに、学習と遊びのために十分な時間を提供し、それを成長のための必要期間として確保しようとする努力が続けられている。

こうみると、物語の中でドレムの生きている世界、すなわち、自らの欲望を満たすためには自らが汗して獲得せねばならない生活、しかも九歳の少年が、おとなと全く同じ狩猟という方法でそれを行なうという生活は、子どものために遊びと学習を保証しようという近代の福祉の精神からは、あまりにもほど遠いものに見える。確かに、未開で、野蛮な社会であった。

しかし、そんな中で、ドレムはいきいきと精一杯に、自らの生活を充実させ、成長の歩みを続けている。そして、彼を包む大人たちの眼も、荒々しいがあたたかく、愛情に満ちている。

ドレムの生きた社会は、子どもとおとなの間に差異を自立たせ、そのちがいで両者をとらえるよりも、むしろ共に生きる人間としての共通性で、両者がとらえられる時代であった。そのゆえに、特別に保護されたり、かこいをめぐらされたりすることな

く、子どもとおとなは、あるがままにまじり合い、いっしょの生活をのびやかに営んでいたのである。そして、子どもは、生活のどんな部分からも、「それをするこゝ自体の楽しみ」を見出し、結果を意識しない無償の行ない、すなわち「遊び」として、それらの営みを続けていたのである。

素朴な自給生活の中で、人間の生き方は、幼い子どもの眼にも、すっきりととらえやすかつたであろう。したがって、子どもたちは、日常的な明け暮れの中で、おのずから当時の社会での標準的な生き方を学習し、獲得していくことができたのである。

ここで、私どもは次のような問題に気づかされる。「児童の生活の近代化とその福祉の増進のために」児童文化という概念を成立させ、そのような運動が進められてきたこと、「児童は小型のおとなではない」という児童観が普及し、「子どものために独特の生活圏が確保されようとしたこと」は、明らかに近代のもたらした一つの成果である。

しかし、その結果、ともすれば、子どもの文化とおとなの文化は、対立関係にある二者ととらえられるようになった。そして、おとなの文化の悪影響から子どもを守るものが、児童文化の課題となってきたのである。そして、「子どもの文化」という特別なものをおとなが用意し、提供して、その中で子どもをいかに快適に生活させるかを工夫するような考え方、すなわち、「児童文化

とよばれる特殊な世界のお客様」として子どもをとらえるような態度が、一般化してきたのである。このような現状はやはり、根本的には間違っていて、ずれているとみてよいのではないか。

前々回から、子どもの文化に関しては子どもが作り手としての役割をになってきた事実にも、照明をあてて考えてきた。そして、ここでは、ドレムの物語に象徴されるような、未開社会での人間の生活を一つの範としつつ、おとなと子どもが共有する生活の中から、人間の文化は生まれ、作られていくものであり、子どもの文化もまた、例外ではないことを、考えてみたのである。

◆むすびにかえて

高度に発達した現代の産業機構の中で、おとなの生活はあまりにも複雑に分化している。子どもの眼がおとなの生活の全体をとらえることは不可能に近い。それならば、おとなの真剣に生きていく場を知ることのできない子どもが、おとなと同一の文化を共有することは困難であろうか。子どもの眼にふれる世界では、おとなはひたすら余暇の文化、息抜きの文化を楽しんでいる。そして、このようなおとなの文化からは、やはり子どもは守られるべき存在のように思える。

とすれば、現代の子どもたちは、文化の作り手でも、共有者でもなく、やはり、「かこいの中の住人」としてのみ、健やかな文

化を呼吸することができるのだろうか。

ここで、次のような具体的な生活例に照明を当てて、考えてみよう。幼稚園におけるある組の、年長児の観察記録である。

——記録A・女兒三名、砂場で遊んでいる。「お料理学校あそび」に熱中している。一人が鼻汁をたらしている。唇のところまでたらしめているが、夢中で遊んでいるので、気づかない。ほかの二人も何ともいわないで遊び続ける。

男児が砂場のふちを通りかかって、女兒の姿に気づき、立ち止まると、ポケットからちり紙を出した。「○○ちゃん、はな出てるよ」というと、ちり紙を差し出した。笑いもせず、きたながりもせず、淡々とした表情。「ありがとう」と女兒は立ち上がった。「ハハ、自分のある」とポケットからちり紙を出した。——

——記録B・男児二名で、カルタを作ることを思いつく。自分のひき出しにとんでいって、ひき出しを引き抜き、ハサミやクレヨンを出す。急いでひき出しをもとにもどそうとすると、もう一人がサッと手をのばして、下のひき出しに入っているほかの子どもが紙や箱を押さえて整理し直す。その上に、強引にひき出しをつっ込むと、下の子どもの持ちものが、くちゃくちゃになるからである。

二人とも、何気ない様子で、各々必要なものを手にして、自分の机にかえる。――

――記録C・男児が、道具箱のたなの前を通りすぎようとする。

一人のひき出しから、画用紙がはみ出ている。すっと、ひぎをついて、それを入れ直す。ほかの男児がそれを見ていて、「あ、○ちゃん、ひとのひき出しあけて」とちよつとがめる。「だつて、出たんだもん」「あ、そう」二人は、あっさり立ち去る。――

――記録D・ままごとコーナーで遊んでいた男児が、へやのすみに移動する。そこで、くじ引き遊びをやりたいらしい。いっしょに遊んでいた男児の一人が、ままごと道具(皿・ガスレンジ)を持ってくる。ほかの男児が「あ、○ちゃん、そんなもの持ってこないで」とがめる。ままごと道具をもとにもどす。それを見ているほかの男児、スツと立って行ってゴザを持ってくる。くじ引き遊びをしている場所の隣りに敷く。そしてそのゴザの上、ままごとコーナーから、皿やガスレンジを持ってきて並べる。ままごとを続けたかった男児も、こちらへ移動してきて、みんなといっしょにしながら、自分の遊びを続けることができた。――

――記録E・女兒三名。ままごとをしている。皿の上に積み木を並べて、料理する。もつといろいろな形の積み木が欲しくなって探しに行く。他のコーナーで、ままごとをしている女兒グループのところでも積み木をわけてもらう。「ひどいわよ、あんたたち、そんないっばい使って。少しちょうだいよ」とかなり強引にもらってくる。

へやの一隅に誰かが積み木遊びをしていたらしいあとがある。「ここ、誰か遊んでいますか」と、女兒三名で問う。「まだ遊ぶのか、もう終わったのか」とへや中を見回す。「誰かさん、遊んでいますか。少しもらっていますか」と数回叫ぶ。「誰もいないらしい。じゃ少しもらいましょう」と一部をこわして、かごに入れる。相手のいる時より、むしろえんりょがちで、そこにいないかつての持ち主を尊重している。――

今、ここに、五つの記録をあげてみた。各々、場面がちがひ、行為の種類もちがうが、一貫して流れる共通性に気づかされるであろう。それは、ごく自然に出てくる、何気ない、「他人への心づかい」である。鼻汁をふいてあげようとする男児、他人の引き出しを直してあげる子ども、ままごとでもできるように黙ってゴザを敷き足す男児など、あたりまえの日常生活として、ほとんど意識にすら上っていないような形で、それらの「あたたかく、よき

行ない」が出てきている。これが、この組の子どもたちの生活の底を流れていて、独特のおだやかさ、あたたかさをかもし出している。そして、このなごやかなのんびりした風土の中で、子どもたちは、各々の活動を精一杯に営んでいるのである。

ここに見出されるような、この組のもっている独特のふんい気、あるいは生活の土壌をなすようなふるまい方の体系を、文化とよぶのは大げさにすぎるのであろうか。

エドワード・タイラーの定義するように、「文化とは、その広い民族誌的な意味においては、知識・信仰・芸術・道徳・法律・慣習その他、およそ人間が社会の成員として獲得した習性の複合的全体である」と考えるなら、そして、文化を、認識・行為・物質の各々の体系として把握されるものとするなら、これはまさしく、この組の成員の行為の体系としてとらえられる「文化」なのではないか。

そして、興味深いことに、この「組文化」は、この組の保育者のふるまい方そのままとみることができるのである。細やかに、言葉よりも行為で、たえず相手に即した「心くばり」を示すことが、この組の保育者の保育行為であった。それが、子どもの世界にまぎまぎと取り入れられて、この組の「文化焦点」となっているのである。

こうみてみると、私どもの周囲で、子どもたちは、おとなとそ

の文化を共有し、共に作り出している。子どもの生活文化は、やはりおとなの文化から独立の「かこわれたもの」として存在するのではなく、子どもの生活行為とおとなのそれとが交差した部分を、「文化」という視点からとらえたもの、といつてよいのではないか。

とすれば、子どもと文化の問題は、単に「文化財を与えること」でも、「価値の伝達」でもなく、子どもと共に作るものとして、その生活をいかに重ね合わせるにかかっていると見えるのではなからうか。

(お茶の水女子大学)



ある研究会で

——周郷先生のお話——

「先生、おすわり下さい」という司会者の言葉に、「いや、皆の顔がみえないから、ぼくは立っています。それに、立っていないと人間、どこかゆるんじやうんだな」と、すわっている私どもが腰をうかしそうになるのを、笑って見回してから、お話が始まった。

「ぼくはきょう、とても興奮してゐるんです」と開口一番、新聞の切抜きを片手に、ジョゼフ・ニードム (Joseph Needham) の「中国の胎動」の稿について話された。いつでも先生のお話をうかがうたびに思うのだが、先生のお話は耳が聞くだけでなく、眼も聞いているような気がしてくる。中国の話をうかがっていると、大きな中国大陸と、小さな島国の日本が書かれ、肩の方に「アジア大陸」とみだしのついたなつかしい地図帳が目につかんでくる。

お話の方も、うっかりしていると思えるほど、次々と移っていく。このニードムがイギリスのテイヤール・ド・シャルダン協会の会長 (ケンブリッジ大教授) であることから、まず外国

人、殊にイギリスの学者の幅の広さをとり上げられた。日本のように教育学、心理学というようにせまい専門的知識だけを身につけていない。ニードム自身も生化学の教授であり、中国に関する研究、人類学の研究にも通じていると話された。そして現在の中国を非常に正しく見ており、日本がいかに中国に対してあやまった見かたをして、あやまった道を歩いているかを指摘している。

「ぼくは、幼稚園の園長なんかをして、幼児教育などとせまいことを考えている時ではない、と思ったんです」とおだやかでないことをおっしゃる。せつかく全国の保育者たちが先生に注目しているのに……。

「でも、今ぼくがイギリスへいってもどうなることでもないよね」というわけで、以前から要請されていらしたイギリスのテイヤール・ド・シャルダン協会の会員になるべく、銀行で送金をずませてきた、とのお話に一同ほっとした。

次に、当然お話はテイヤール・ド・シャルダンのことになり、この偉大な人類学者についてかいつまんで話され、またまた思わぬ人物が登場した。シャルダンが北京にいたころ、シャルダンと親しくして、のちに家政大学の教授となられた遠藤隆次教授のことである。教授が北京にシャルダンをたずねられた時のこと、北京飯店 (最近、藤山代表らが泊ったところ) にいったところ、最初へやがないと断わられたが、シャルダンと知り合いであると

いうと一番上等なへやに案内された。それほど中国人はシャルダンを尊敬し、シャルダンも中国人を理解していたのである。

先生がその教授を大学にたずねられ、お互いにシャルダンのことなど、意気投合して話し合われた。そしてうす暗い廊下を帰られる先生のとを追ってこられたその老教授が「あなたの停年はいつか、停年になったらここへこないか」といわれた。「なんと無邪気な人でしょう。七十いくつですよ」と先生自身もまた、実に若々しい面持でいわれた。

外国の学者の幅の広さというところから、ノーベル文学賞を受けたチャーチル、詩人である毛沢東、それに反して口を開けば「高度経済成長」としかいえない佐藤首相のことにまでいった。昨年、オメツプの記念講演をしたフランスのガストン・ミアラレ(G. Maillard)は冒頭にユーゴーの詩を引用した。そしてその著書「現代教育入門」の中で次のようにいっている、「教育は、人類始まって以来人類最大の関心事であるのに、皆が本気で考えていないということが現代の危機である」また「教育は知識ですべきではなく、もっと人間的な行動である。したがって教育は芸術である」と。

人間の中には遺伝とだけ簡単にいえない、遠い昔からなにか細い糸でつながれたものがあって、今、自分がいっていること、していることは、本当は自分がしているのではなく、そのなにかが

させている。これがフロイドなどのいった感情情緒、意志といったもので、このほかにピアジェのいう知性があるわけである。前者は芸術と労働の中で教育され、それに知的発達のための教育が加わり、三者一体、全面発達の教育が理想なのである。

ドイツのシュタイナーという人は人間を植物にたとえておもしろいことをいっている。植物の脳は地面の下にある根である。そして植物は、手足である枝、葉に労働をさせてどンドン育っている。人間もこの姿を学ぶべきである。

しかしこれらのお話は、実は本題ではなく、きょうの本題は、とメモに書かれたフランス語を先生は読まれた。ちょっとてれくさそうに……。まだ先生も私も若く、学生の前ではほとんど顔を上げずに講義をされたあのころの先生を見るようだった。私にはエッセイというところぐらいしかわからなかったが、「幼児教育に關する、思いついたまま」というような意味だと訳して下さった。

そしてますますお話は佳境に入り、「日本人は間食が多すぎる」といわれた直後に、皆の間に飴をのせたお盆がまわると「間食もエレガントにやればいいですよ」と外国婦人が、それこそエレガントに、お魚を頭も尾も一つも残さずに食べているのを見た時の驚きを話して下さったり、予定の時間をすぎてもお話は続き、そのあと今度は私どもの方から、いいたいことをいわせていただいたり、本当に楽しいひとときだった。(みどり会研究会 赤間記)

特殊幼児の保育

渡辺祝子



自閉症のS君

Sは、愛育研究所に二年間、週一回の治療に通いながら、公立の幼稚園に一年通園し、すでに学齢期に達していました。しかし就学は無理と診断され、研究所からの依頼で私どもの幼稚園に入園することになりました。

四十五年四月八日（水）

母親に手をひかれへやに入ったSは、額に八の字をよせ、落着きのない目であたりを見回し、ひとりごとをいいながらほうぼう見て回る。母親に似て背が高い。（一二二cm）

「Sちゃんこんにちわ」と声をかけても無関心。ちょうど園庭の土手の上を汽車が通ると「きしゃ、きしゃ」といって急に庭に

飛び出し、すべり台にかけのぼってじっと見ている。

普通児の行動とはあまりにかけはなれたその様子から、瞬間的に、集団の中に入って危険はないのかしら、ほかの子に対しての影響は、等の不安が私の胸をかすめた。「この子は汽車と高い所が大好きなんです。それに、こんなに広々として今までとは環境も違うし、きつと喜んで通うと思います。どうかよろしくお願いします」こちらを信頼しきった母親の態度と、もしこれが子がであったらと思う気持とで、多少の不安はあったが、少しでもよい結果が生まれるよう努力してみようと思い引受けることにした。「入園式は遠慮します」との母親の言葉で次の日から、五歳児（二年保育児）三十七名のクラスの一員に加わりSの生活が始まった。

四月十三日（月）初めての登園

母親に手を引かれ登園する。「Sちゃんおはよう」と声をかけても知らん顔、「くつをとりにかえておへやよ」とさらに顔をのぞきこむようにして声をかけると、べたんとすわりこんでうわぐつにはきかえる。母親からは簡単に離れた。へやにつれてくるといきなり私の手をふりきって表情をこわばらせ、あたりかまわずほかのクラスをのぞいて回る。呼んでもこないのでもそのまま遠くからSの行動に注意する。降園前にクラスの子どもたちに「Sちゃんというの。すこし言葉がわからないのでみんなといっしょに遊べないかもしれないけど、親切にしてあげてね。教えてあげると、だんだんお話ができるようになるわよ」と紹介する。背が高いのに変だといわんばかりの顔をしていたがどうやら皆納得した。

四月二十日(月)

登園するなり母親から「昨日帰りましたら急に『渡辺先生、渡辺先生』と何度もいうのですよ。今までいろいろな先生と接してきましたが、こんなに早く名前がいったのは初めてです。びつくりしました」と報告される。へやめぐりが落着き出すと、興味が砂場に変わった。

幼稚園の門をくぐると、そのまま三歳児の砂場にまっしぐら。汽車があるだけ連結してから、上ばきにはきかえるようになった。上ばき、外ぐつの区別もできるようになった。

四月二十二日(水) 家庭訪問

狭いアパートのへやいっばいに、Sの玩具がすわる場所もないほどきれいにならべてある。この中のものが一つでもなくなったら大変で、幼稚園に行っている間に掃除してまたも通りに並べておくのだそうだ。

Sは正常分娩で乳児のころは手がかからず、おとなしいので、あまりあやしたり、声をかけたりもしないで育ててしまった。そして、保健所の三歳児検診の時「言葉がおそく異常」と診断された。そのうちしゃべるだろうと気楽に考えていたので驚き、それからあちこち相談に歩き、今日に至ったことであつた。なししろ、言葉のつながりに助詞が入らないので、意味がわからず、母親はSの表情や行動で判断し、要求を読みとって何でもしてやっている。Sは、しゃべらなくてもあまり不自由を感じない。これでは、いつまでたっても言葉を覚えなから、聞いても聞かなくても、問いかけたり、同じ言葉をいわせたりして、簡単になんでもやってやらないように、なんとかしゃべる機会を作るようにお願いした。

五月十三日(水) 園外保育

近くの天神様で園外保育。母親付添いで参加。帰りは違った道を帰った。するとわけのわからぬことを口走り、大声を出してみたり、歩道をジグザグに歩いたり、だだをこねる。「往復の道が違ふところなんです。幼稚園の帰りも回り道しようものなら大変

なんです」と母親はいう。幼稚園に帰るのだと話しても聞き入れず、園に着くまできわいでいた。

六月七日(日) 父親参観日

幼稚園の門まではきたが一步も中へ入らず、母親の手を引っぱって帰ろうとしている。日曜日を知っていて、いくら説明してもわからないのでというので、無理をせず、帰ってもらった。曜日と、新聞のテレビ番組には、特別の関心があるようだ。

六月十二日(金)

このごろ、クラス全体で集まるときはなんとなく部屋に入ってきて、そばに寄ってくるので椅子を出してあげるとすわるようになった。

降園前「小さなネコ」の本を読むと、急に大声を発し「ネコ、ネコ、ネコ」といって前に出てきた。読み終わると同時に、待ち構えていたように、私から本をとり上げると、表紙のネコにはおずりしている。その後本立てにしまっておくと、登園するなり出してきてままとコーナーで開いて見るようになった。

毎日ままとコーナーでネコの本を見る日が続いたある日、突然そばにあったクレヨンで表紙のネコをぬり始めた。「先生Sちゃんの本をぬっちゃったよ」と大きわざ。これをきっかけに、自由画帳にネコを書いてあげると輪郭の中をめちやめちやではあるがぬるようになった。クレヨンなどもったこともないので、母親

に話すと驚いていた。

六月十八日(木)

実習生が、ネコの模様のエプロンを掛けてきた。それを見るなり「ネコ、ネコ」と大声をあげ、からだをくねらせてエプロンを引張ったり、にこにこして学生の前や後ろに回ったり、そのうちおぶさったり、抱かれたりした。これがきっかけで、教師にもおぶさったり、抱かれたりするようになった。おぶってもらいたい時は、いきなりとびついてくるので、「Sちゃんおんぶっていの」と教え、いうまでおぶわれないことにした。自分が要求している時は言葉も早く覚え、「おんぶおんぶ」といえるようになった。私が話しかけると、背中から顔をのぞきこんだり、髪の毛を引っぱったり、わけのわからぬことをしゃべったり、満足そうである。いつのまにかSの額から八の字も消え、表情がやわらかくなった。

七月六日(月) 友達の名前を覚える

ままとが好きだが、もっぱら人形をいじったりままと道具をならべたりのひとり遊びであったのが、女の子の仲間に入っていくようになった。

その中にRという髪の長い子がいて、クラスで一番先に名前を覚えたのがRである。

そばに寄って行って髪をさわったり、「Rちゃん、Rちゃん」

と顔をすりよせて親愛の情を示す。あまりそばに来るので本人がいやがって逃げ出すと、追いかけるのが面白いのか、ついて行く。急に対人関係の成長が見られるようになった。

九月八日（火）遊びの変化

砂場の汽車から水遊びへと発展する。ほかの子が、ホースで砂場に水を出して遊んでいるのをじっと見ている。「みんなSちゃんもいれて」「いいよ」「Sちゃん、はだしになってごらん」Sはにこにこしてはだしになり砂場に入る。やわらかな砂の感触と、冷たい水が気持ちがいいのか、すっかり気に入ってしまった。

「面白いね。これホースよ」Sはずぐ「ホース、ホース」という。登園するとすぐ砂場に行き、私に「ホース、ホース」という。そこで少しずつ言葉をふやして「ホースをとって」「ホースとってください」「渡辺先生ホースとってください」と続けていえるようになった。こうして次第にクラスの子どもたちに友だちとして認められるようになってきたある日、

「Sちゃんおりこうになったね」とか、「先生、Sちゃんばかりかわいがってずるいよ」と、こんな不満が聞かれるようになった。Sの勝手気ままな行動が許されなくなってきたのである。

そこで皆との約束として、ホースで水を出していても、お集まりになったらやめることにした。初めの二、三日はホースをしようと私につかみかかってきたが、だんだんわかるようになり、



Sがはじめて描いた絵（たま入れ）

「Sちゃんお集まり」というと水道をとめ、はだしの足も洗い、一人でくつをはいてへやに入るようになった。すこしずついろいろの遊びをするようになったためか、職員室に入る回数もへった。

十月十日（土）運動会に参加

夏休みは、カレンダーめぐりがSの仕事だと母親からたよりがあり、その後もずっと続いているとのことだった。父親参観の日登園には失敗したが、運動会には参加させたいと思い、一週間前から家庭と園のカレンダーにしるしをつけ、「この日は運動会よ」といい聞かせていた。当日はその効果があったのか、無事に登園してすべての競技に参加、母親は「今までどの行事にも参加できなかったSが、きょうはちっとも目立たず、見ていて信じられないようでした」と感激していた。二日後にみんなが運動会の絵を書く時、Sもいっしょになって、線書きではあるが、いちばん喜んで参加した玉入れの絵を書いた。

十月二十四日（土）遠足

だいぶ集団行動がとれるようになったので付添いなしで秋の遠足芋掘りに参加した。畑の中を歩き回ったり、時々お芋を掘ったりした。Sの袋を見て「先生、Sちゃんすこしだからわけてあげよう」とみんながお芋をくれたので、袋はいっぱいになり、大事そうにかかえて帰りのバスに乗った。ところが降りる時座席の下に袋を忘れ、気づいた時はバスは帰ってしまったあどだった。

「S（袋に書いてある苗字と名前をいって）お芋、お芋」とくり返し、半べそで大きわぎ。その日は代わりのお芋を持ち帰ったが、夜になっても「S、お芋」が続き、翌日車庫へとりに行き、自分のお芋に面会した時は大喜びをしたとの報告であった。

十二月二日（水）歌を覚える

円になって「えんそく」の器楽合奏をやっていると、突然中央に出てきて歌い出した。みんなはびっくりして合奏をやめてしまった。「Sちゃんみんなと歌いたいのよ。合奏してあげてね」といって、また初めからやる。一番、二番、言葉と音程もしっかりと正確に歌ったので、みんな二度びっくり。たくさん拍手をしてあげる。Sは目を細めて、満足そうであった。

四歳のクラスにも行って、大好きな「不思議なポケット」のうたを「ポケット、ポケット」とリクエストする。ピアノをひくと嬉しそうに歌い出し、後奏が特に気に入って曲に合わせて足をバタバタならし楽しそうに声を立てて笑う。新しい歌をみんなに教える時は、そばにきて私の口に自分の口をつけるようにして覚えようとし、ピアノがひけなくなるほど、体をすりよせてくる。二、三回それをくり返すとほとんど覚えてしまう。少しのんびりしているTよりはるかに覚えが早い。一学期のころ、みんなが歌い出すと、両手で耳をおさえ、へやのすみで小さくになっていたころが嘘のようである。

一月十九日(火) 粘土をやる

ほかの子が粘土をやっているのを見て、私のそばにきて「怪獣、怪獣、ウルトラセブン」といって粘土の塊を机にくっつけて立たせると、バラバラにこわれてしまった。Sは「いたいよう、たすけてー」という。「いたいね」といって私が手や足をとれないようにくっつけて立たせてあげると、「セブン、セブン」と喜ぶ。もつとやってくれと私の前にもつと大きな塊を持ってきたが、ほかの子からも話しかけられ、Sの相手になってあげられなかった。それ以上続かなかった。家に帰っても粘土をいじり始めた。報告があった。上ばきもすわりこんではかなくなつた、とび箱、鉄棒にも皆といっしょに参加できるようになつた。また紙芝居、絵本等を読み終わるまで一度も席を立たず見ていられるようになった。

二月三日(水) 豆まき

鬼のお面(紙袋)をかぶって豆をまく。Sは「グリーンピース、グリーンピース」といいながらへやじゅうをかけ回ってみんなといっしょに豆をまく。

女の子ばかりだが、五人位の友だちの顔と名前が一致して、はつきりいえるようになった。

Kの話

「先生、Sちゃんかわいいね」「どうして」「だって、いじわ

るしないもの。Sちゃん、学校へ行けるでしょ」「そうね、このごろお早うもさようならもいえるし、よくわかるようになったものね。だいじょうぶ、行けるわよ」。

この一年間、Sと生活も共にしたこともたちは、彼の入学を自分のことのように気にしている。園児数百名という小規模な幼稚園の中で、自由保育を主体として、全園児、全職員とふれ合う毎日が、彼の成長をここまで助けたのだと思う。

しかしSは、まだ相手からの質問に対して答えられないため、それが友だちとの対話の大きな壁になっている。

しかし私がいっしょになってまごことあそびにはいれば、私と同じように動作や言葉を真似し、遊びが長続きする。つまり現在のSにとっては、相手に自分の気持を伝えてくれる人が必要である。

今後ますます、Sが積極的に友達の中にはいろうとすればするほど、私との接触を必要としてくるだろう。

しかし私は、クラスの子どもたちとも接触しなければならぬ立場であり、ようやく心を開いて来たSを、どのように指導したらよいか……この指導いかに、これからのSの生活に大きな変化をもたらすのではないだろうか。

(まんとみ幼稚園)

ユートピア

かべの耳が聞いた話

清水 光子

ある日ある時

——きのうのテレビごらんになった？

——ええみましたわ。あの「零蔵からの教育」とかって、あれでしょう？

——そう、私、何だかぐらついちちゃったの。うちの子、これでいいのかしらって。

——私もよ。来年学校でしょ。バスに乗り遅れたんじゃないかって感じ……。

——そうねえ。だけど私ね、あとでよく考えてみたの。それで……。

——どうなの？

——だって、あの漢字のお授業、あれで字を本当に覚えたかしら、と思ったの。それとね、ああしてお話聞かせた字を教えたって、それに「狼」なんて字を覚えたって、どうってことないんじゃない？

——だけど、記憶することは能力を開発するってお話だったわねえ。

（かげの声 「なかなかよくみてますな」）

——そうなのよ。だったらあんなお話でなく、もっと楽しくできないものかって。

（かげの声 「いい線いってる」）

——あら、あなた、うちのババみたいなことおっしゃるわ。ババったらあれ見ていて、なあんだ、つまらん話だ、ですって。漢字を教えるためのお話なんでしょう。ウサギとか、橋とか出てくるあのお話、面白くはないわね。

——私もそう思ったの。それに、きいているお子さんや、漢字カードをいじっているお子さんたちの顔、うれしそうじゃなかったわね。

— そうですね。うわの空みたい
な……。

— それに「知能」っていうことがた
くさん出てきたじゃない？ だも
んで、うちの主人はね、知能がのびる
ばかりじゃ、人間ってそれだけじゃ
ないんだから、○夫に何だかんだ今
になって教えるな、っていうのよ。
あの子、あまりI・Q高くないもの
で……。

しばらく一同無言、ややあって

— あんなふうに教えられてなくても、
うちの子、このごろ外歩いてい
ると、看板なんかの字、あれ何て読む
のって聞いてうるさい位。

— うちもなの。幼稚園に持って行くタ
オルにひらがなで名前書いたら、漢
字で書いてって言うのよ。

— 字とか、何かにとっても興味をもつて

いるのはたしかね。

— 好奇心のかたまりみたいなの。それ
をつぶさないようにしたい、とは思
うわ。

— とにかく幼稚園が楽しくてたまらな
いのね、今は。

(かげの声 「お立派ですよ、そのとお
り」)

— この間、○○○のおけいこの先生が
お休みというお電話があったら、○
子ったらああうれしい！ なんてい
うの。喜んで行ってると思ってい
たのに。

— ほら、○組の○ちゃん、お勉強に行
ってらっしゃるでしょ。I・Qが十
いくつ上がったって、ママ、喜んで
いらしたわ。

— ところが、おうちでとっても荒れる
んですって。妹さんをぶったり、物

を投げたり……。

— そうですね、幼稚園で机にじっとし
てるんで、先生が「○ちゃん、気持
悪いの？」ってきいたら、「何でも
ないよ」って。先生が熱もないから
って外へ誘っていらしたそうよ。

— そうなると勉強させるのも考えちゃ
うわね。

— うちのババの言い草じゃないけど、
熱くならないうちに鉄をうってもし
め、ってことね。

(かげの声 「名言です」)

— あら、お迎えに行かなくちゃ。また
「何分遅れたよ」なんていわれちゃ
う。

— そうね、行きましょう。

(かげの声 「話し合うっていいこと
すな。皆さん、すーっとしたかな？」)

(音羽幼稚園)

三歳児と 一年間を過ごして

鈴木直美



はじめに

この私に「先生」なんてつとまるかしらと、不安で胸をいっばいにさせて「入園」してから約一年。あいかわらず満足なこともできず、たえず、こんな「先生」でいいのかしら、と不安を抱いている私のまわりを、去年の四月には小さくて赤ちゃんみたいだった我が恋人たちが、ひとまわりもふたまわりも大きくなって走りまわっています。

三年保育の一年目、三歳児十五人のクラスをひとりで受け持ち、無我夢中というか、バタバタとあわただしい一年間が終わりつつある今、一年間をふり返って、感想やら反省やらまとめてみるどころか、なぜかとてもはずかしくて、こんなふうによくの方に読んでいただくなんて……という心境です。

「我が恋人たち」などと書かせていただいたけれど、私がかくも胸をはっていえるたった一つのこと、十五人のひとりひとりが、かわいくてかわいくて、いとしくて、離れがたい存在であること、そしてそのひとりひとりの恋人たちに、誠意をこめてけんめいに接し、彼らひとりひとりと、一つ一つの愛をはぐくんできたこと、ぐらいいです。

児童学科で四年間、「子どものこと」をいろいろな方向から、かじる程度に学んではきたものの、さして勤勉な学生でもなく、おまけに、幼稚園の先生になるなどと思っていなかったこともあって、いわゆる「保育技術」的なことはほとんど学んでいなかった私にとって、最初に書いたように、もちろん自分でやろうと思ったことながら、現実を見つめた時の不安たるや、大変なものでした。ともかくいっしょうけんめいやってみよう、私にできる精

いっぱいのことをしようと覚悟を決めて……などという大げさすぎるかもしれません、かなり悲壮な思いで幼稚園にきたと記憶しています。(そして一年、本質的に怠けものなのか、それに加えて楽道家だからなのか、悲壮な覚悟はいつのまにか日々の流れに消されてしまったようですが……)

我が園の、遊びを中心にしたいわゆる「自由保育」のおかげと、先輩などと口走るとバチがあたりそうな立派な先生方に、助けていただいたり教えていただいたおかげで、なんとか私も、無事一年やってこれたのではないかと、切実に感じています。

遊びを中心にした自由な一日……私にはもちろん、三歳のまだ集団生活にもなれない子どもたちには、まずとても楽しい幼稚園でした。四月のスタートは、ともかく幼稚園って楽しいところなんだな、もっと遊びたいな、と思える一日一日にしていこう、それも十五人のひとりひとり全部が。だから遊びまくりました。

『ままこと』、『大きな積木』、『お砂場』が人気のあるベストスリー。おかげで私は、毎朝まず、男の子に自動車を走らせるための大きな積木の高速道路を作られ、女の子にままことのおうちで、いろいろなものをおなかに入りきらないほど食べさせられ、しばらくして遊びの二つ目の山のところに、必ずと喋っていいほど、砂場で大きな山を作られたり、大きな池を掘られたり……。でもそれもやがて、ひとりふたりと小さな手を砂だらけにして手伝っ

てくれる子がでてきたり、いつのまにかなんんかで並んで同じようなおだんごを作っていたり……。

四月九日が入園式で、おかあさんと完全にみんなが離れられたのが十六日、そのころから友だち関係の芽も出はじめ、そろそろ名前が覚えられてきたようでした。『お帰り』でみんなをへやに集めてみると、誰かひとり足りず、さがして帰ってくると違う子がいない、ということもちょくちょくでしたが、ただバラバラと遊んでいる状態から、『自分の組』という意識ができて、うれしく解釈させていただければ、『鈴木先生のそばにいます』となにか楽しいことがあるし、『自分と同じような子がいる』と思えてきたのか、わりとまとまって遊べるようになってきました。

新米先生の私としては、ひとりひとり楽しそうでもいいけれど、こんなことでちゃんとクラスのまとまりができるのかしら、友だち関係ができていくのかしら、とそんなことも実はとても心配だったので。そんな私を感激させてくれるかのように、けっこうなにかを機に『飛行機ごっこ』のように、ほとんどの子がお客さまに乗って、残りの子がお見送り、盛んに手を振りあってみたり、そんなほほえましくなごやかなまとまりがでてくるような『雨の日』もあつたりしました。

四月いっぱいにはそんなようにして、思いきって遊べることを、を

中心にしました。本当によく遊べた日は、ふしぎとお帰りの時の顔がずっと晴れやかで満足気……そしてそんな日は必ず私自身も子どもたちと同じように、走りまわり、ころげまわり楽しく遊べた日。よけいなことを気にせずに、私と子どもたちがしっくりいった日であることに気がついてきました。「保育」ってまず仲良しになって、同じレベルにおいて「遊べて」、その中ではじめてなにかを教えたり、しつれたり（あまり好きな言葉ではないのですが）より良い方向へ子どもたちを向かせていくことなのではないか、ということにも気がつきました。

五月になると、暖かくて外で遊ぶことがふえ、お砂場とおすべり、それからたいい先生ひとりが逃げる（先生から離れられずに、必ず手をつないでいっしょに逃げてくれる女の子がいました）鬼ごっこが一時期流行しました。ほとんどの子が、ひとりぼっちでいることが減り、お友だちの良さを知っていると同時に、そこにいろいろな面での力関係ができてくると、けんかもでてくるし、大きな声で「いばる」子どもでくるし、反対にいつもびくびくしている子どもでてきました。

そんな中で、ひとときわ目立ったSちゃんは入園当初からからだが大きくて（四月生まれ）わがままっぽいところがあり、なにか気にいらないとすぐ暴力に訴えようとするところがあって、表面

的には困る行動が目立っていました。五月ごろになって友だち関係ができてくると、どうしても「アニキ分」で、文句があると思う手が出るので、相手の子どもついついゴキゲンとりになります。そのうちに、「Sちゃんがこわい」と常におびえている女の子や男の子までが出てきて、一時は私も悩まされましたが、よく見ていると、落着いている時はとても良い遊び方ができているし、おうちでは手をふり上げたこともないとのこと、どうも四歳になるまで、ひとりも同年齢の友だちがいなかったため、友だちと遊ぶことが初めてで、遊び方がわからないらしいということに気がつきました。

それで、彼の気持を受け入れて、彼が困った時はいっしょに困ってあげ、ほかの子どもたちにも、Sちゃんは決して悪い子ではなく、こうしたいのだと通訳をかけてで、なるべく暴力がでずにことがすむ機会を多くし、そうすればSちゃんも気持がいいし、みんなもうれしいことに気がついていくように努めました。

一ヵ月ぐらいたつと、もうほとんど大事にはならず、むしろSちゃんの明るさ、やさしさ、たくましさ（？）などがクラスの友だちの人望を集めるほどになってきました。五月から六月にかけて、園生活にも慣れ、ベースに毎日の楽しい生活がいろいろな面でゆるやかに、より高い段階へ着実にステップを刻んでいたことが幸いしてか、私にとつては「Sちゃん、Sちゃん」が心を大き

く占めていた毎日も、ほかの人たちに悪い影響どころか、かえってSちゃんを軸に、クラス全体が私を含めてずいぶん良い経験をし、成長できたような気がします。Sちゃんに限らず、トラブルがあるということは、発展の、かなり大きなきっかけになることが、このごろ実感として感じられました。けんかは、むしろ良いことと思えるほど、けんかをしたことが双方のひとりひとりにも、ふたりの関係にも、まわりをとりかこんだ友だちにも、クラスになることが多いんだなど気づいたのです。(もちろん、どんなけんかでも、というわけではありませんが。)

今(三月)ではもうなにもいわずとも、紙をもってきてはなにか描いたり、切ったり、セロテープではったり、けっこういろいろなものを作っていますが、五月にコイのぼりを作った時などは、集めたわけではないのに、めずらしく大勢の子どもが机のまわりにすわり、ただ四角い紙にお魚らしいものを描き、それを切って竹ひごに糸でつけるペラペラのコイのぼりにすぎなかったのに、やれ描けない、切れないと泣き、「描いて」「切って」と大声でわめくみんなをなだめすかして、なんとか手伝いながらできあがったものでした。

ケツサクなコイたち……。エプロンまで切ってしまった子がいるかと思えば、絶対切るのはいや、と真四角のままだったり、小

さな赤ちゃんコイがいくつかいたり、(切りくずに眼がついているだけ)「ワンちゃんのコイのぼりつくる」なんていう子がいたり……。『絵画製作』といわれる領域も、我がクラスでは一年間こんな調子で、ついこのあいだも、時計のボンボリのついたおひなさまやら、赤ちゃんのいるおひなさまやら、ともかく楽しいものを作って見せてくれます。

六月から七月にかけて、ひとりひとりがすっかり幼稚園になじんで、はじめのころ緊張していた子どもはその緊張をとき、はしやぎすぎていた子どもは落ち着き、本当にその子らしさがわかってきたのがもう一学期の終わり近くでした。集団としての落ち着きもそのころになってやっとまあまあ、たまにはみんなで歌をうたったり、レコードをかけて遊んだり、お話を聞いたり、紙芝居をみたり……。私自身もこのころにはだいぶ落ち着き、二ヵ月もこの子たちにあえなくなるのがとても寂しい気がした夏休み前でした。

その長い夏休みを終えた二学期、みんなグリーンと大きくなり、元気にスタート。しばらくして私が出張して留守をしたあと、みんなのうれしそうな顔などは「先生、バカ」としてはゴキゲンなできごとでした。「お店やさんごっこ」など、わりに規模の大きな「ごっこ遊び」もずいぶんできたし、むしろ私はいない方がいい

くらの、友だち同士の遊びも活発になってきました。

十月には、運動会と遠足とおいもほり。運動会では、お花の体操をしました。男の子がなかなかのつてくれず、女の子がまるくなっている、ナンダカンダ文句をつけて、そのくせ走るリズムの時はいっしょに走ったり（けつこう気は向いているらしいのですが……）。おへやではそれでもいいけれど、みんなで練習する時にまで、オフザケムードで、私としてはかなり気になりました。めずらしくお説教めいたこともあって、ドキドキして当日をむかえました。でも当日はまあまあふんい気にもまれたのかちやんとやってくれてひと安心。ついつい形になるところばかり気にしてしまうのはいけないかしら、と思いつつ……。

遠足では広い緑の上を、私も、子どもたちも走り回って、ころげまわって、とても楽しい一日でした。私自身、春の遠足よりずっと気分的に楽だったせいか、広いところでも思いきり走れたようです。

十一月の初め、少し風邪気味でのがいたかった時、いつもこんなにも動いているのかしら、いつもこんなに大きな声を出しているのかしら、と大発見のような気持でした。前者はともかく、入園当初、できればからだにふれて、Face to Faceと心がけて

いたし、またそうしないと聞いていない子どもがいたのに、今ごろになると離れたところでも聞いてくれることをいいことに、つい遠くからどなってしまふのかしら、と大いに反省。そのほかのことでも、いつのまにか怠慢になっていることがないかと、反省のよい機会でした。

十二月になって、冷たい風が吹いてきて、外の遊びが減り、おへやの中でほとんど全員が遊ぶようになると、自然に毎日毎日と同じようなくり返してマンネリ化し、グループのようなものも固定化しがちになり、何か新しいことがないかと、みんなが望んでいるようでした。

こんな時にできたのが音楽劇のレコードでした。わがクラスのリパートリーは「赤ずきんちゃん」と「狼と七匹の子やぎ」そして一番好きな「白雪姫」……。いまだに毎日のようにバックミュージックのごとく、くり返しメロディーが流れ、それに加わっている人数は日によってさまざまながら、よくも飽きずに、と思うほど楽しそうにやっています。たしか「幼児の教育」の三月号に、この音楽劇を初めてやった時の様子を書かせていただいたのですが、あの時の状況から一回、一回の上演になにかしらの発展が見られ、役割通りのけんかもなく、見事に交替しながら、気のせいかな「演技力(?)」も向上しリズムにもあって、なによりも

楽しく遊んでいます。

女の子のこのブームに圧倒された、ウルトラ警備隊員たちも、

時には、小鳥とか、王子さまとかで参加したり、観客(?)に
ったり、おへやを占領された彼らを外に出すために、冷たい風の
中を走り回る先生の怪物が、かえってうれしくて追いかけたり、
組みついてきたり……。二学期の末はこのように、わりに大きな
グループの遊びが落着いて続き、だからといってそれにこぼれた
子どもたちも、ちゃんと満足に遊べていて、学期末の忙しさに追
いたてられていた私には関係なく、しっくりした感じで二学期を
終えられた気がします。

三学期は、入園選考などがあつたりして短かった上に、お休み
が多く(風邪、水痘)こじんまりと、チョコチョコと毎日が過ぎ
ていった感じがしています。もうすつかり友だち関係もうまくい
き、遊べずに一人ぼつんとしている子どももいなくなり、グルー
プごとにかなり良く遊んでいるのを、時々気をつけながら毎日数
人ずつの子どもと、じっくりつきあえる日が続いています。小さ
なけんかは日常茶飯事というなら、むしろ平穩無事ともいえる毎
日で三学期を終えつつある現在ですが、「こんな毎日でいいのかし
ら」の疑問は依然として、常にモヤモヤと胸に漂っている私の心
境です。

おわりに

このようにつたなく書きつらねた一年間ですが、本当は文章に
など書きあらわせないほどの、一日一日の、ひとりひとりの歩み
が、私とも複雑にからみあって、私の心の中にズッシリとした重
みとなって存在しています。もっとしつかりした、実践の記録の
ようなものが書ければよかったのですが、以上のような表面的な
流れの中に、ひとりの新しい幼稚園の先生と、十五人の新入園児
たちが、お互いに成長してきたものが、きつときつと、形にはな
っていないとも、ちゃんとあるのだ、ということ、わかっ
ただきたい——というより、私自身が信じたいのです。

一方で、まだまだ未熟で、半人前もつとまっていけないのではな
いかという不安や、実際に、もっとこうしたらよかった、ああで
きたらよかった、と反省の種はつきないのですが、それはこれか
らどんどん勉強し、身につけていきたい、という姿勢に甘えさせ
ていただいて、ともかく精いっぱい一年間をすごし、子どもたち
の成長を確かめ、喜び、その子どもたちといっしょに、私もまた
成長してきたと、今、信じていたのです。この一年の重みの上
で、四月からあらたに二十人の子どもたちを迎え、よりいっそう
がんばっていきたいと、思っています。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

困ったこと

丸山ふみ

「先生、読書会の時、劇的な機会、瞬間に子どもは成長するということ。暖かく優しいまなざしを大切にしたい」と帰ってまいり、頂戴したテキストをまた自分なりによみかえしておりましたの。ところが、この間のテレビ（注、NHKわれら七〇年代・幼児教育）をみていて、主人とも話したのですが、わからなくなりました。

山の子ども（注、岩手県北上川上流の少年）が、この世の中にいたことにも驚きましたし、おしまいの漢字や英語も、びっくりしました。

見えて何だか心配にもなっていました。ちょうどお兄ちゃんを受験（注、長男中（学生））のこともありますので。

教えてあんなに覚えるのなら、教えてやったほうが、N男のためになるのでしょうか。

以下略

十一月下旬、連絡ノートに記された母親のことばです。

私の園は、三重県のまん中程にある人口十万余の松坂市の中心から少し離れた、まだ田んぼの残っているところにある、級数六、園児数一六五名（五歳児のみ収容）の市立幼稚園です。

急速な宅地造成で住宅団地もでき、今の日本の平均的な生活が営まれている地域です。

共働きの父母をもつ幼児がふえつつありますので「連絡ノート」と名づけて、ひとりひとりの幼児のようすや成長を、父母と教師とで連絡しあったり記録として残しておくノートを使っております。このノートにしるされております読書会は、父母の間を回覧している「子どものしあわせ」（日本子どもを守る会発行・月刊誌）を、それぞれが読んでいます。

でなく、お互いの感想を交換したいという母親達の希望から生まれたものです。

ところが、十一月月上旬、本屋から届いた『幼児の教育』を読んでいた職員の中から、

「十一月の読書会に、これを使いたい。ぜひやらせて。そうすれば、先月の読書会の解答にもなる」

という提案が出され、職員間で検討した結果決定したのが、

『幼児の教育』十二月号、二ページ〜九ページ「現代の教育と子ども」という周郷博先生が附属幼稚園母の会で話された講演の記録でした。

早速、読書会係が、全文をガリに切り、洋半紙五枚のテキストが用意されました。

あいにく読書会の日は、肌寒い日でしたが、参加して下さった十数名の母親で輪読が始まり、はじめの頃は、話しかけられている口調に、なかなかなじめなかったのですが、「……………よね」の「ね」をうまく読んで下さったお母さんが、いらっしやって、

「なんだか周郷先生が私に話をして下さったようだよ」

とひとりの母親は喜び、また、

「教会の友達から借りた『母と子の詩集』の先生とおなじ方じゃないかしら？」

といった母親は、その詩集の中にある『子どもはなんでも知って

いる』という詩のことを話され、

「周郷先生っておいくつ位なの？」

「ねえ、どんな方？」

と意外なところへ話題が広がってしまいました。

このようなふんい気から、活発な意見や感想が出てまいりました。

「ことばって本当に大切ね」

「いやな程、私の話し方やしぐさに似てるの。これは、子どもって小さい時から母親にべったりだからかしら？」

「そうよ。冷たいまなざしでみつめてると、子どもの心の中まできむぎむとしていくのが手にとるように分かる時があるわ」

「でもさ、女って衝撃をうけないなんて嘘よね。私達って、いつでもビクビクしているのに。」

「そうね、子どもが小さいうちはのんびりできるけど、お姉ちゃんみたいに、テスト、テストってかわいそうよ」

「でも、それを乗りこえていくことも、今必要でしょ」

中学三年生の長女をもたれるM男のお母さんの言葉は、真剣です。

「強制されたものは役に立たない」には共感される方が多く、その内容として自分の学校生活の中での思い出話になり、先生に

よってこうもちがうの”の例には、同じ教職にいる者として返事に困る一時もあり、

「こういうことを、ずばり、お母さん達に話してくださる周郷先生って好きやナ」

といわれたある母親の言葉は、いままんだか残っています。

“これからどうしていけばいいのか”ということで、

「わたし、目つきに気をつけるワ」

「だめだめ、目ってね、じぶんの気持が出るのよ。口だけうまいこといっても、目はごまかせないわよ。だから、目つきにだけ気をつけていても、中味がかわらないと駄目ね」

「今までね、どんな絵本買ってあげたらいいかなんていっていただけど、それもあかんの」

「誰さんなの、万博へ何度もAちゃん連れていったのは？」

「あの時だって、やっぱり子どもにいろんなものを見せておかないと、これからの世の中についていけないと思っちゃったのね」

「なんだか今の私達の生活の中に足りないものがあるようね」

「子どもが幼い時に、何かにめぐりあう。めぐりあわせることは、親ではできないのね。めぐりあったことを気づくようなひとになってほしいなあ」

「先生、私もう家に帰りたくなかった。私って、本当に今までそ

んなこと一度も考えずにあの子みていたようよ。」

はじめての女兒を通園させていらっしやる若い母親の言葉に笑い声が早くも消え、皆が真剣な表情になってしまいました。

そのようなことがあって数日経ってから、テレビをみた母親から、連絡ノートに感想がぼつぼつ寄せられました。

「英語はよいのですが、あんなに漢字を知っている子がいるのに、幼稚園からお借りしてくる絵本を、眠る時読んでやっておりましたけど、自分で読ませるほうがいいでしょうか」

と昼間勤めていらっしやる母親の質問には

「Hちゃんは、自分でも読めるのですよ、白いうさぎと黒いうさぎ”はHちゃんの大好きな絵本ですから。

でも昼間お母さんがいらっしやらないのですから、Hちゃんは”お母さんに読んでもらえるのが嬉しい”のではないでしょうか。お忙しいでしょうけど、読んであげて下さいね」

と返事を書いたものの、字が読めるほうが読めないよりはいい、物語の内容を、知らないより知っているほうがいい、だから、じぶんで読めることはいいい、じぶんで読みなさいという理屈はあるかもしれないが、幼稚園でHちゃんが絵本を読んでいる口調は、きつとお母さんの口調であるにちがいない。Hちゃんは、お母さんが好きなの、だから、お母さんに絵本を読んでもらうことはH

ちゃんにとって嬉しいことにちがいない。それなのに、じぶんで読めるようになってほしいということを連絡ノートへ書けないのである。

文字を読めること、書けること、数をとねえること、書けること、小学校入学をひかえて、父母達はそういった知的能力の伸びることを望んでおり、小学校の新学習指導要領の移行措置で、一年生の学習内容の増加を、噂話として知っている。

その中で、私達は幼稚園の生活とおして何を考えればいいのか。あのテレビの具体的に示された幼児の姿について、多くの父母の間ではいろいろと話されたらしく、ある父親から、次のような感想をいただいた。

「先生、テレビをみた時、これは大変だなとおもいましたよ。

たいしたもんだとおもったのですけどね。戦後の教育をうける人は、当用漢字しかしらんし、使う言葉も貧しいですね。私のように戦前の教育うける者は、カタカナも平仮名も漢字も、たくさん知っております。昔の武士の子は、漢字を小さい時から読まされましたし、英国の子は小さい時から英語知っているやないか、と家内にいってやりましたよ。

字を知っていても悪いことに使って人間として悪い生活している者が今多いですね。うちの坊主のように寒くても平気で外でころろ遊んでいるのが幼稚園や。いま、のびのび、

十分遊ばしたろやないか。人間はからだをきたえておけば、自分の進む道を自分で歩けるようになるさ。といいましたけど、まちがっていませんね。

でもね先生、現実には、進学する時、あんたとこはこの学校受験できません、といわれると親は困りますわ。

日本の子どももやったら、そんなに地域に差つけやんと、子どもの教育やのに、実験みたいなことやめて、五歳の時やること、はっきりしてほしいですわ」と。

(松阪市立花岡幼稚園)



本なな
あんな

「ちいさいモモちゃん」

「モモちゃんとプー」

松谷 みよ子 著・講談社

村石 京子

今月は、とてもかわいい童話をご紹介します。でも、ご紹介などといっても、もうお読みになった方もいらっしゃるでしょう。なぜなら、この「ちいさいモモちゃん」は、一九六四年に第一刷が発行されてから、今までに二十三刷まで版を重ねてきました。その間に、どんなにか大勢の人たちに読まれ、親しまれてきたかということがわかります。なかでも、小学生の人たちがとても喜んで読みました。けれど小学生ばかりでなく、おとなが読んでも楽しい童話なのです。皆さんの中にも、もうきつとモモちゃんをかわいがって下さった方たちがいらっしゃることでしょう。その「ちいさいモモちゃん」について、今度「モモちゃんとプー」という続編が出ました。

この本をここにとりあげたわけについて

て、少し書いてみたいと思います。私は小さいころから本を読むことが好きでしたし、大きくなったら、童話を書くか、絵本を作る仕事をしたと思ったこともありました。学校を卒業して、幼児の教育を志すようになったころも、よい本、よい童話を作って子どもたちにあげたいと考えていました。いっしょに同じ道に進んだ人で、絵のじょうずな友だちがいて、二人でよく話しました。私が童話を書いて、彼女がさし絵を書き、二人で本当に子どもに喜ばれる素晴らしい本を作りたい。こうした夢をもちながらも、なかなか現実の道は遠く、実現し得ずに年月がたつてしまいました。そんなある日、この「ちいさいモモちゃん」にあったのです。私はこういう童話が書きたかった、それが目前にあったという思いがしました。

そのころは、まだモモちゃんは生まれて間もなくで、ママがお仕事の間は「あかちゃんのうち」へ行っていたり、「ほいくえん」で友だちとあそんでいたりました。そしてだんだんとモモちゃんも大きくなりました。五つになったモモちゃんのところには、妹のアカネちゃんも誕生しました。そしてモモちゃんももうじき学校です。また、モモちゃんが赤ちゃんのときから仲良しだったしっぽばたばたのじょうずなブーという黒猫は、およめさんをもろうことになったのです。それが続編の「モモちゃんとブー」のお話なのです。

私の本だなにずっと以前から立っている「ちいさいモモちゃんの隣に今度「モモちゃんとブー」が並びました。それがうれしくて、ここにとりあげた次第なのです。ちいさかったモモちゃんも随分成

長しました。まだ三つ位のモモちゃんしかご存じでない方は、大きくなってお姉さんになった姿を是非みてください。

児童文学の各賞を受賞した松谷みよ子さんのいろいろな作品は、幼児から小学校の上級学年まで、広い層に親しまれ、読まれ続けていますが、私のようなおとなの愛読者もきつと多いでしょう。童話だからといって、幼児に読んできかせようとすぐかまえてしまわないで、自分で読んで楽しく味わっていたい感じですよ。もちろん、この童話の中には幼児の心というものが、実に立派に描かれています。一人の主人公をとおして、幼児の心理と行動というものが、ある面ではリアリティックに、またある面ではファンタジックに、明るく物語られています。

しかしそれだからといって、幼児教育に直接役立つことを、とばかり考えて読むよりも、もっとゆとりをもって読む方が楽しいと思います。作品をとおして感じられる暖かさ、ふくよかさなどによって、読む人の胸のうちがほのぼのとしてくることでしょう。この何か春の光のような味わいというものは、どこから生まれているのでしょうか。私には、作者の心の中の、本当に子どもを愛し、いつくしむ力が源となって文章ににじみ出ているのだと思われます。

これからも新しいよい作品を生み出し、活躍して下さるようにと願い、そして私もまた、いつの日にかこんな童話を書いてみたいと思いつながら、この項を結びます。

小学校入学直前の幼稚園の生活 (一)



お茶の水女子大学

幼児保育研究室

小学校入学直前、つまり、幼稚園の五歳児三学期の一月、二

月、三月は、幼児にとつて、最も充実した時期のようである。そう考えてよいような場面を、私どもはしばしば経験する。幼稚園にも十分に慣れ、友だちとも遊べるようになり、仲間の中の遊びが面白くてたまらなくなってくる。自分から遊びをみつめて、大胆に振舞えるようになるのもこの時期である。

警戒しながら、用心深く、幼稚園生活の中に入ってきた子どもも、この時期には見違えるほど幼稚園の生活にはまりこんでしま

うのが普通であろう。四歳から五歳への、いろいろの経験の積み重ねもある。子どもたちは、幼稚園で、大たいどんなことが起こるのかの見通しもある。その中で、自分たちが参加して何か大きなものをつくり上げていく喜びや期待も知っている。しかも、その中で新しい発見

や、新しく取り組まねばならぬ問題にぶつかる。

これから小学校へと進んでいくこの時期に、幼稚園の生活はどのようなものであったらよいのか。これまで積み上げてきた幼稚園生活の最後の時期として、この時期をいかにして充実したものとするかは、幼稚園の現場の人々にとつて共通の課題であろう。また、幼児期から児童期へと移りゆく発達の問題としても、重要な課題である。

これからここに掲げるものは、昭和四十五年度の五歳児の二期、三学期に、お茶の水女子大学附属幼稚園の山の組(堀合文字教諭)の生活を、観察記録によって示そうとするものである。

なまの記録をそのままに示す部分と、簡略化したものと、考察や解釈を加える部分とある。実際に動いている現場を、文字で示

すことには、多くの困難がある。また、観察記録でとらえることのできるものは何であるかという根本問題もある。これらの困難な問題の自覚の上に立って、できるだけわかりやすく、また、事実をとらえて、幼稚園の生活を示してみたいと思う。

一、女の子だけの劇遊びに、男の子も加わる

三学期の初めから、女の子が主になってシンデレラの音楽劇をしている。ほとんど毎日、保育室の中央部を占めて、レコードをかけて、それに合わせて女の子たちがおどる。言葉はあまり使わない。お面や、小道具や、いろいろのものを作って、いろいろの人物になる。二十名くらい加わっている時もあるし、数名の時もある。午前中はほとんどだれかが劇をしている日がつづく。

ある日には、それは低調に見えることもあり、ある日にはさかんになる。見ている側からいっても、もう少しこうなればいいのと思うような時もある。ところが、別の日にはその問題は解消して、先に進んでいる。男の子の参加のことも、このような問題の一つである。

シンデレラの音楽劇には、なぜ、男の子は参加しないのだろうか。これは観察していたものにとつて、疑問でもあり、興味でもあった。ところが、三月八日には、男の子がみごとに参加している。先生が特別にさそいかけたこともなさそうである。無理した

り、あやつたりした気配は少しもない。一日だけ訪問して見学した人には、どうして、もっとさそわないのだろうかという疑問が起きたかもしれない。しかし、時間をかけて、音楽劇が経過していくうちに、(その中には、目に見えない形で、先生の指導がこまやかにある)男の子も参加する。(津守 真)

三月八日 S夫の「お面作り」と劇あそび

九・二〇

- ① S夫、立ったまま、「花さかじいさん」の絵本を見ている。(女児数人、シンデレラの劇遊びを始める。レコードがかかる)本と同じ、足をすって室内を歩いたりままごとコーナーへ行く。
- ② 小走りに材料だのところへ画用紙をとりにいき、引きだしからクレヨンとはさみをもってきてすわる。
- ③ 画用紙を頭にあててから形をかき、立ち上がりはさみで切る。先生のそばへいき助言を得て、ゴムひもをたくさんつける作業をしながら、室の中央の、シンデレラ劇遊びをチラチラ見る。

九・四七

- ④ できあがった小鳥のかぶりものをかぶって、両手で羽の動作をしながらシンデレラ劇のそばを通過する。(宮殿のダンス場面)
- S夫は、このあと続いて、同じように黒ネコとニワトリのかぶりものを作る(記録省略)

劇遊びはグループが散ったが、先生が入り少人数ながら続いている。S夫は作った作品を三つそろえてピアノの上におき、男児数人と色紙に名前をかく活動へ移る。

一〇・五五

⑤ 先生と女児数人がねむり姫の劇あそびの準備を始めると、S夫は「それじゃあ、みなさん（男児）さようなら。ワシは悪いおばあさんになるぞ」といいながら、クレヨンを片づける。

⑥ 女児が、黒いきれを渡すと、頭からかぶる。（男児たち、「見ようか」といい正面のいすにすわる）

⑦ 黒いきれをかぶったS夫は、観客になっているM夫に、「おまえは、くらげになれ」と声をかける。M夫も応じて、二人で笑いあう。

⑧ レコードがかかり劇が始まる。

くり返しあそんでいるうちに、へやへ帰ってきたK夫や、カメラのかぶりものをかぶったH夫も劇にスツと入る。K夫が入っているのを見て、指をさして笑ったM夫も加わる。

「大きな大根するものこの指とまれ」というS夫の声に子どもたちは準備を始め、「大きな大根」の劇が始まり、次には「ちびくろさんぼ」、続いて「花咲かじいさん」といろいろな劇あそびが展開する。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

この記録では、細かく書き表わせなかったが、はじめのお面作りでは、S夫は、役割をとるといふように積極的に参加をしているのではないが・材料だなど機の往復でのレコードにあつた足の動き、リズムカルなからだの動きは、心の中で音楽劇に参加していることを示している。・③の製作をしながら劇あそびを見るという行動・④の行動などでは、さらに積極的に劇遊びに参加する過程である。この「かぶりものを作る」という活動の過程と劇遊びとのかかわりあいの変化は興味深く思われる。後半、S夫が役割をとって劇遊びに参加したことから、ほかの男児たちも加わり、この劇遊びは発展する。

一見すると参加していなかったように思われる男児たちも、ほかの活動をしながら、たとえば、絵をかきながらレコードに合わせてハミングをする。手拍子をたたいたり、声をかけたりするなどの形で劇に参加している。一つのへやの中で異なったいろいろなあそびが展開する中で、お互いに関係しあつて発展し、そこにある、すなわち、開かれたいくつかの集団が大きな集団を作っているという状況は、大変望ましく思われた。（松井とし）

S夫は作ることの好きな子どもで、この日も製作から劇遊びに円滑に参加している。次の記録のT夫とE夫は、もっと劇遊びの周辺部において、何度か、近づいたり離れたりしながら参加した例

である。(津守)

三月八日 E夫とT夫が劇遊びに加わる過程

九・四〇

E夫とT夫が部屋のすみの机のところへこしかけて、何か話をしてる。何をしたらよいのかははっきりしないが、からだを動かしてみることによって、何か遊びに出会えることを期待して動いている様子である。

へやの広い部分は、劇遊びの子どもたちが使っている。劇が始まると、E夫とT夫は劇の方に向けておいてあったいすにこしかける。こしかけていても、いすを動かしたり、立って歩きまわったりして落着かないが、劇に目を向けている時は、とても熱心に見入っている。劇の登場人物の扮装を指さして、「あれっ、いじわるかあさん、ようせいじょ」などと話している。

庭で遊んでいた子どもがさそいに来て、ちょっと外に行くが、すぐにもどってきて、いすにすわる。

劇を見ていて、劇をしている子どもにもE夫が「このやろう」といったり、何か二人で、劇に向かって文句をいっている。しかし、E夫の足は、ばたばたと動き出している。二人とも劇に参加したい様子である。

E夫は立って、劇の場の中に入りこんでいって、劇をしている

子の一人に、わざとぶつかると。その子が「いたいわね」というと、「おまえだって、やったんだぞ」といって、また、劇のあたりをうろうろしている。また劇をしている子が「くやしい」というと、E夫は「こっちだって、くやしいんだよ。このやろう」と、おこったようにいう。

やがてT夫は外へ出て行く。E夫も少しあとから外に出て、T夫といっしょになる。外では、最初二人で砂のかけあいを少しして、その後、ニワトリの入っている白いさくを見つけ、その中に入ったたり、T夫を追いかけて、つかまえてさくの中に入れてという遊びを発見してやっていた。このさくのまわりに、山の組の男の子五、六人が集まって仲間はふえたが、E夫の追いかけるのは主にT夫であって、ほかの子たちがこのさくの内外で遊び出すと、二人は、このさくでの遊びからぬけ出した。

二人は手をつないで、ブランコに行く。ほかに二人いっしょにきて、四人で、鉄棒や、ブランコにさわってみている。そこで、『たかおに』をすることになって、ジャンケンをする。『たかおに』は、すべり台や、庭のまん中の木のまわりや、バラのたなところや、さっきの白いさくや、砂場や、ままごこの家の中など、園の庭いっばいに、自由に高いところをみつめてやってた。

T夫が「ぼくやめた」というと、E夫も「やーめた」といって、四人ともへやに入る。外で活動していたせいか、へやに入ると、すぐに画用紙とマジックをもってきて、次の活動の準備をする。マジック、紙を机の上において、四人がいすにすわったすそそばに、劇遊びが展開している。T夫は、手もとの紙やマジックには時々気がついたように手をつけてみるが、すぐに劇の方に入る。

一一・三三

劇が一とおり終わった時、T夫のとなりの子が「ちよっと、ぼくもやるから」といって立つ。先生が「ぼくも入れてくださいって」というと、となりの子の行動と、それを認めた先生の言葉に勇気づけられたように、T夫が「ぼくもやる。これはあとで」といって立ち上がる。E夫は「あとでやるなんて、いけないんだよ」といって、すぐには立ち上がらないが、まもなく「おれもやっぱり、あとでやろう」と立ち上がって劇に加わる。

T夫は劇の人たちの中でうろろろしているが役が得られなくて、一度机のところにもどってくる。もう一度、劇の中にもどってトラの役を得る。E夫がT夫のトラのしっぽをつけてあげる。

「先生、今度は、チビクロサンボ」という声がして、「チビクロサンボ」が始まる。T夫は、うれしそうに出演を待っている。

E夫は、役はないがT夫のそばにすわっている。出演になると、

T夫は、自分の場を得て満足な様子で演じる。E夫はT夫について動いている。

T夫の扮したトラがかさをもらうと、E夫はかさを、T夫のしっぽといっしょにもって、ついて走りまわる。

「チビクロサンボ」が終わると「こんど、シンデレラだ」という声が出た。すると、T夫は「ぼく、シンデレラ」といって、手をあげる。結局、劇は「花咲かじいさん」になって、T夫の役はなかったが、いっしょに歌ったりして、劇に加わって満足な様子である。E夫もT夫のとなりで見ている。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

九時四十分から十一時五十分までの、E夫とT夫の動きを追ってみたが、二人は、へやの広い部分を使って展開している劇遊びに、かなり心をひかれながら動いていた。そして、へやの中では劇遊び以外の活動に入ることに困難を感じて外へ出て行ったようだ。外ではかなり自由に動いていた。

しかし、再びへやに戻った時には、やはり劇が気になっていた。T夫自身は、動き出すきっかけがみつからなかったが、となりにいた子が思いきった動きで劇に加わっていったので、この機に劇に加わることができた。T夫とE夫は、朝から劇に加わりたかった様子であったので、この加わる瞬間に、どっと全身のエネルギーが出されたような感じがした。(秋間直美)

「加わる瞬間に、どっと全身のエネルギーが出されたような感じがした」ほどに、この二人の男の子の参加した瞬間は、この子どもたち自身にとって、意義のある体験であったに違いない。参加するようにいわれて参加したのとは違う。自ら進んで一歩をふみ入れた決定的な瞬間がある。(津守)

二、戸外で美しいものにひきつけられる体験

室内では劇遊びを中心とした活動が行なわれている一方、戸外では、一日中をほとんど庭で過ごしている子どもたちがある。この子どもたちも、また別の日には、劇遊びに参加する子どもたちである。この日には、戸外で美しい氷片にひきつけられて過ごす時間がある。幼児に欠くことのできない、精神的体験である。

三月八日 真四角な氷片を作ってみよう

一〇・一〇～一〇・二五

風は冷たいがよく晴れている。I夫は、A夫、Y夫とお気に入り「宇宙エースごっこ」をしていた。

先生が出てきて、石畳の上にちらばっている氷片に気づき、しやがみこんでいじり始めた。子どもたちが寄ってきて、いっしょに氷をつまんでみる。I夫、A夫、Y夫らも、手にしていたフリーの輪(シルバールリング)をおいて、のぞきこんでいる。先生が、マンホールにはまっている鉄格子の上に氷片をのせてみる。

先生「こうやっておいとくとね」

A夫「とけちゃう」とどなってからだをのり出す。

先生は笑って「そうなの。氷はね」先生が、格子の上のせた氷片をそっと指で押してみる。見ていた子どもが、「できた」と叫ぶ。

先生「できた、できた、ホラ、こんなに四角いのが」先生は楽しそうに笑う。子どもたちはめいめいに、薄いのや厚いのを手にとってみて、四角の氷を作ろうとし始めた。

先生は、「ここは四角い氷の製造工場」といいながら、子どもたちといっしょに、氷片を格子の上に並べていたが、ほかの子どもによばれて立ち去る。

子どもの群も散らばって、A夫、Y夫、G夫らは「宇宙エースごっこ」にもどる。I夫も、一応はシルバールリングを手にもってかまえるが、すぐにそれをおいて、氷のところにしやがみこんでしまった。

マンホールのふたのところでは、ほかの組の子どもが三名ほど、氷をいじっている。

I夫は、いっしょにしやがむが、すぐ立ち上がって「おい」とA夫らに呼びかける。また、しやがみこんで、四角い氷を作るのをのぞき込み、すぐ立ち上がって、A夫らの方へ二、三步、歩きかける。が、すぐもどってきて、またしやがむ。

Ⅰ夫としては、A夫らの遊びも気になるが、氷をいじつてみた
い気持ちの方がより強いようだ。しかし、どこかにためらいがあ
るらしく、のぼしかけた手が宙にとまりがち。時々、そつとさわ
つてみる。もう一度、立ち上がって、フラフラとA夫たちの方へ
行こうとするが、またしやがみこんで、今度は、しっかりと氷片
をつまみ上げた。それを持ち上げてちよつと眺め、もつとうすい
のと取りかえる。そして、それをそつと格子の上においた。Ⅰ夫
は、自分一人でも、真四角なきれいな氷を一つ、作ってみよう
という決断をしたらしい。

Ⅰ夫「これぼくのだよ」「お楽しみだなー」と、誰にもなく
語りかける。

A夫たちが、シルバーリングをかまえて「バルダンがいない」
と叫んでいる。バルダンはⅠ夫の役割であったが、Ⅰ夫は、一心
に氷を見つめていて、ふり向こうともしない。

もう一度「これ、僕のだよ」とくり返す。Ⅰ夫は今、完全に氷
のとりになっている。Ⅰ夫の中に、真四角で、すきとおった美
しい氷片のイメージがあるらしい。ちよつと、からだの位置を変
えながら、「もうちよつとこちちから」と氷片を静かにずらす。
さつき、先生たちが作った四角い氷片が落ちている。Ⅰ夫は、そ
れをつまんでちよつと見つめ、ピョイと下におく。

「これぼくのだよ」Ⅰ夫はもう一度、くり返ししながら、氷の上

を指で四角くなぞる。なぞるのをやめて、じつと見ている。

真四角な氷が、格子の形にはまって、カチンときれいに割れる
瞬間を、じつと待っている様子である。しかし、その瞬間はな
なか、やってこない。Ⅰ夫は、また、氷片を持ち上げてみた。

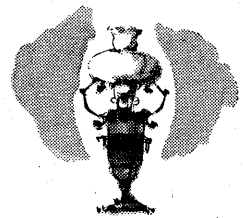
「これ、できないじゃない」そばにいたM夫が、「よし」と、そ
の氷を受けとり、格子の上に押しつける。あまり強く押ししたの
で、氷が格子の間から落ちてしまった。

Ⅰ夫「みんなできなくなっちゃうよ」と抗議めいた口調でいい
ながら立ち上がって、足もとを見る。またしやがみこんで、もう
一度、大きな氷片を格子の上においた。

Ⅰ夫「これで、できるかな」ちよつと、押しつけてみて、持ち
上げる。ほぼ四角に割れるが、少しいびつである。Ⅰ夫は、手
ひらにのせて、ゆがんだ四角形を見つめ、片方の手の指で、それ
をゆっくりいじる。「やっぱり、真四角にはならないのかなー」
という表情。ゆっくりと、斜めの辺をいじる。

Ⅰ夫は、ピョイと顔を上げた。氷をパツと落とすと、フープの
輪（シルバーリング）を持って、A夫たちの方へかけて行った。
短い時間を、自分なりに集中して過ごしたあとの、サッパリとし
た表情である。（本田和子）

ヨーロッパの旅（十二）



平井信義

マールブルクの夜は、次第にふけていく。駅前通りのまっすぐにつき当たったところにあるこのホテルも、通りの裏手にある一室となると、物音一つしない。外は、暗やみである。ふと、二重になった窓を開いて、やみを見詰める。へやの灯がほのかに崖に生えた木々の輪郭をうつし出しているが、はっきりとは見えないう。その崖の上には林が続き、さらにその林をのぼり詰めたところに、お城がそびえているはずである。

このお城へは、何回のぼっているであろうか。第一回は、十六年前、初めて西ドイツに留学した時であった。人通りの少ない石畳の登り道は、霧がたちこめていた。登っていくにつれて、その霧は濃さを増し、私の鼻や口をふさぐのではないかと思うほどであった。坂道が急になるほど、そのような感じが強くなって、外

には人影の見えない霧の中で、不安になったのを思い出す。しかし、坂道を登り詰めた時に、霧に漂いながらも巨大なお城の壁が私の目をさえぎり、その高みに蔦のからんだ小さな窓が見えると、ベンチに腰をおろした私の頭の中に、幻想がわいてくるのであった。

このお城に誰が住んでいたのか、どのような歴史をもっているのか、私は知らなかった。しかし、その小窓からかわいい女の子のぞいたことがあるにちがいない。

——その子は多くの侍女を相手に暮しており、遙か目の下に小さな影となって走り回っている子どもたちの姿を見ることはできても、その子どもたちと遊ぶことは許されていなかった。

あの子たちと遊びたい——どうぞそれがかなえられますように——と、毎晩女の子はお祈りを続けた。また、食卓にでるいろいろなごちそうやお菓子を、その子どもたちに分けてあげたいという想いから、少しずつ残すようになり、日増しにその分量が多くなっていた。その心は、侍女たちには通じなかったし、王様やお妃様の心を暗くした。いろいろな方法で、かわいい姫の心を引きたてようとしたし、その理由をいつてごらんともたずねた。しかし、その答が両親の心を暗くすることを知っていた姫はなにも答えようとしなかった。

ある夜、女の子は、ふともの音がするのに気がついた。その音は、風もないのに草がゆれ、それらがふれ合う音であった。そっとベッドから降り、しのび足で窓べに寄ってみると、窓の外では何人かの妖精が、お城の石のわずかなくぼみに足をかけて、お城の壁をはうようにして生えている蔦で、はしごを編んでいるのであった。窓べに女の子の姿が映った瞬間に、妖精たちの姿は、クモの子を散らすように見えなくなった。しかし、その次の夜も、またその次の夜も、草がゆれ、それらがふれ合う音は続いた。女の子はじっとその音をききながら、ベッドの中に身をひそめていた。次の夜も、また次の夜も、そしていく夜も、不安と期待の中でその音をきいた。

ついに、何の音もしない夜がやってきた。姫はじっときき耳を立てていたが、戸外はひっそりしていた。また、きき耳を立てたが、もの音一つしなかった。ふとんの中から起き出した姫は、窓べに近づいた。そして、そっと小窓をあけて、下をのぞいた。そこには、谷の底まで、蔦で編んだはしごが青黒く続いていた。

そのはしごにさそわれて、姫はそれを伝って降りる決意をした。着物に着がえ、窓べに足をかけて窓わくをふみ越えると、ひと足ひと足と、蔦のはしごを降りていった。足をかけるたびに、それがゆらぐのではないかと不安になったが、はしごはきちっと足をささえてくれたので、難なく地上に降り立つことができた。

そのあと、どのような足どりをたどったのか、女の子にはわからなかった。町かどの灯りをたよりに、右に曲がり左に曲がりながら、石畳の上を歩いていくと、広い窓に灯りがこうこうとはえている家にとどりついた。

窓からそっと中をのぞいてみると、姫と同じ年ごろの女の子とふたりの弟たちが楽しそうに玩具で遊んでいる姿が目につり、その背後には、おとうさんとおかあさんが、おとうさんは新聞を読み、おかあさんは編物をしながら、時々子どもの遊びを見ている姿が見えた。

トントントンと戸口をたたくと、「はあい」という元気のよい

声がして、女の子が戸をあけてくれた。それは、姫を待ち受けて
いるようであった。

四人の子どもたちは、ひとしきり楽しく遊んだ。姫には、初め
て経験する楽しいひと時であり、帰る気持は全く起きないほどで
あった。しかし、あたりが少しずつ白むころ、子どもたちは姫
に、お城へ帰るように入った。そして手をひっぱるようにして戸
口から出て、蕪のはしがが下がっているところまで案内してくれ
た。姫は、この時初めて、お城に帰らなければならないことに目
覚め、いそいそとはしごをのぼっていった。下を見おろすと、子
どもたちの姿は全く見えなくなっていた。

このような幻想は、ドイツ文学を勉強していたころ、ドイツ浪
漫派の作品を読みふけていた時に始まる。ことに、ルードビッ
ヒ・ティークの童話^{メルヘン}は、私の心をひきつけた。ティークはたくさ
んのメルヘンを書いているが、わが国にはほとんど紹介されてい
なかったし、現在も同様な状態が続いている。

その後、私はドイツ浪漫派から離れたが、その作品の中に現わ
れた幻想は、いつまでたっても私の心を離れなかった。それが、
マールブルクを訪れた時に、私の心によみがえったものである
う。霧の中で、このお城に面とぶつかった時に、再び幻想にとら

われたものと思う。そして、十五年を経て、さらにホテルの小窓
をあけて夜の気を吸い込んだ時に、この幻想が再び私の脳裏を占
めたのであった。

その翌日、マールブルク大学の精神科の児童病棟を訪れた。以
前、私が滞在していた時の古い建物はすっかり取り払われて、新
しいデザインの建物に変わっていた。古い建物は、大きな木々に
取り囲まれて、どの部屋からも暗い印象を受けたが、私にはその
方に親しみがもてた。

今、近代的な建築に変わり、周囲にあった木々がすっかり取り
払われてみると、確かに新しい装いに変わったけれども、はたし
てそれが子どもにとっても母親にとってもふさわしいものか、い
ぶかしく思えるのであった。

九時から始まったビジテに参加する。このビジテというのは、
ケース・スタディといってもよいものであろう。入退院の報告を
する集まりで、教授を中心として全医局員がそれに参加すること
になっていた。二名の新しい入院患児について報告されたが、一
人は犯罪少年のケースであった。小さい子どもを公衆便所に連れ
込んで、絞殺しようとした例であった、と思う。ドイツの学風に
ふさわしく、環境論と素因論とが戦わされていた。ドイツの――
そしてヨーロッパの学風には、素因論が根強く残っている。何か

というと素因に持ち込もうとする傾向があり、私はかねがね不満をもっていた。

特に、その少年の家庭は複雑であり、同じ家庭内に正妻とほかの女性とが同居し、きょうだいの数も六、七人という家庭であったから、詳しく家庭環境に原因を求めてみなければならぬことと考えたのであるが、意外にも素因論が強く打ち出されていた。それにしても、西ドイツにも、崩壊家庭や複雑な家庭があり、裏から西ドイツの家庭をみると、決して健康なイメージだけで西ドイツの家庭をみる事ができなくなる。

家庭というものは、どこの国においてもさまざまな問題をもっているが、その中でゆがんだ人格を形成していくのが子どもたちである。家庭というもののむずかしさを、しみじみと思い返すことができた。

ビジテを終わると、医局長が病院を案内してくれた。ウェーバーさんが児童病棟を主宰していたころは、十六、七名の子どもたちが収容されているに過ぎなかった。子どもの数が少ないことを、ウェーバーさんは誇りにしていたほどである。ところが、大きな建物に変わり、近代的な施設、設備をもち、大勢の子どもが入院してくるとなると、そこで働いている職員と子どもたちとの親しい関係(ラポール)は阻害されてくる。以前、ウェーバーさ

んと子どもたちとの間にかもし出されていた暖いふんい気は、もはや、失われていた。そこには、大きな病院の冷たさがあった。

ヨーロッパでは、子どもの施設に関するかぎり、それが病院にせよ児童福祉施設にせよ、大きな規模となることを極力警戒している。私の恩師であるベンホルト・トムセン教授も、そのことをさかんに強調されていた。教授が日本に来られた時、日本の施設がその規模の大きさを誇る風潮があるのに対し、さかんに警告を発しておられたのを思い出す。わが国の幼稚園にも、子どもの数が多かったり、近代的な施設や設備を誇る傾向がみられるが、園長や職員と子どもたちとのラポールがはたして成立するかどうか、よくよく検討してみる必要がある。

病院内を回っていて、面白いできごとにつづかった。それは、大きな子どもたちが収容されているへやに入った時のことである。へやの窓側のところで、十六歳の少年が、立ったままからだを前後にゆすっていた。ちょうど玩具の木馬が前後にゆれているような状態であった。近づいてみると、少年というよりもおとなに近い状態で、童顔はうせ、ひげが濃く生えていた。じっと一点を見つめたまま、同じようなリズムでからだをゆすっているのは、異様であった。

医局長の話では、ヘラー病の子どもで、すでに五歳の時から入

院し、今日の状態に立ちいたっているということであった。「終日、あのようになっているのですよ」と説明してくれた。

私は、かねがねヘラー病には疑問をもっていた。それは、自閉症と非常によく似た状態像を示すからであり、自閉症が発見されるまではしばしばこの診断名がつけられていたからである。

私は、その子どもに接近してみた。私よりすでに身長が高く、私の手が彼の手を握った時に、彼はチャラッと私の顔を見おろすようにした。私に、なにがしかの興味をもったことがくみ取れた。

そこで、私は、首からぶらさげていた写真機を彼の前に差し出し、その手に触れさせてみた。その時、彼のリズムミカルな運動が一瞬とまった。そして、写真機に触れた。私は、彼の手をしっかりと握りながら、写真機のファインダーからのぞいてみてごらん——といった調子で、彼の目の前に写真機を差し出してみた。しかし、それには無関心の態度を示したので、私は急いでそれを取り去った。

その時、医局長が「先を急ぎましょう」と声をかけて廊下に出たので、やむなく私もその後を追う形になった。廊下に出て、「どのような根拠で、彼をヘラー病と診断したのですか？」と医局長に質問しかけた時に、彼がすうっと私のそばに来て、写真機に手を触れたのである。私はうれしくなり、写真機を彼の顔にか

ざして見せ、彼の肩に手をかけた。

それを見て、医局長はびっくりしたような顔つきをしていた。

「彼には、最近、このような行動は全く見られなかったのです。ふしぎだ！」

「私は、たくさんの自閉症児と接触しているものだから、彼も私に親しみを示したのではないかと思うが……」

「だから、自閉症児の扱いはすぐれているということになりますね」

そういいながら、医局長はその子どもの目の前の変化について、若い医局員に話してきかせたのであった。

おそらく、この子どもは、ヘラー病と診断されて以来、治療教育的な方法がとられずに現在に至ったのではあるまいか。ヘラー病は脳障害の範ちゅうで考えられている。わが国にも、自閉症が誤って脳障害と診断され、何の治療教育も受けずにいることが少なくない。もともと、医学的な診断の中には、診断をつけられないで、治療や教育につながらないものが少なくない。時には、親をあきらめの気持におとしいるのが、医者役割のようになさえている。

診断をつけるということは、医者に興味の対象であり、そのた

めにあらゆる訓練を受ける。しかし、その診断を親に告げたときに、親がどのような気持になるかについては、少しも考えようとしなない。親は、診断などはどうでもよいのであって、その子どもをどのようにしたらよい子にすることができるかを聞きたいのである。その方法について教えてもらいたいし、医者に対してもその点での希望をつないでいる。

私が自閉症児の仕事を始めた当初には、それと同じような気持をもっていた。しかし、そうした子どもたちを見放すことができないうような気持となり、試行錯誤ではあったが、いろいろな方法を用いることによって、自閉症児の治療教育に対する光明が見出せるようになった。また、脳障害のために異常行動を示していると考えられている子どもたちにも、治療教育の方法が少しずつわかってきたのである。

特に、子どもとの一対一のつき合いの中から、その子どもなり のよさを発見できると、それが緒口となって、次々とその子ども のよさが発見できるものであることを知った。それと同時に、この考え方は、普通児といわれている子どもについても、同じような妥当性をもっていることを考えるようになったのである。

医局にもどって、コーヒーを飲みながら、私は、治療教育の体

制をどのようにしているか質問した。しかし、その答えは、何もしていない——ということであった。その理由として、「心理学者を採用するに十分な人数が得られないし、自分たちもたくさんの子どもの診断に追われて、治療教育的な接近ができないでいる」という答えが返ってきた。

治療教育が行なわれないままに、ほうり出されたり長期に収容されている子どもたちは、なんと不幸なことであろうか？ 私は暗然とした気持になり、このような病院から発表される研究には、価値をおかないことにした。これは、バリーでも経験したことであった。

病院を出ると、秋の陽ざしが明るかった。私は、HさんとYさんといっしょに、裏の山に登りながら、一日も早く不幸な子どもたちを救うために、世界の学界に向けてどのような発言をしたらよいかを考えていた。

(大妻女子大学教授)

愛珠

想い出ずるままに (十四)



中村道子

一 幼稚園教諭の資格認定を受く

昭和二十三年といっても、終戦後として数えれば、浅い年月で私達保母は保育の合間を縫うようにして、戦後の修改案の雑用に追われていた。

二期期にはいつて間もなく、大阪市教育委員会から通牒がきた。それはこの九月十五日と十六日の二日にわたって、幼稚園教諭の認定講習が行なわれることになり、保母は皆、この講習を受けねばならぬということだった。そしてこの結果、受講者全部は、修了後にレポートを提出して検閲を受け、あらためて幼稚園教諭二級の資格が得られるので、今もっている資格は全部幼稚園保母二級の仮免許だそうであった。

「それはなぜ」とか、「今ごろなんでこんなことをいつてくる

のでしょう」と、不審そうにいう人もかなりあり、「これは市教委からの通牒であって、市教委の方へどこからいつてきたのでしょうかなア」という人もあったが、とにかく講習を受けて、幼稚園教諭二級普通免許状を受けたのである。

次いで二年足らずの後、またこうした講習があつて、前と同じように受講後、レポートを提出したが、今回も職員は五人とも、幼稚園教諭一級普通免許状をもらった。これらの人たちは皆本園では一組を担当し、かつ前歴として小学校の三、四年を担当していた経験があつたから、苦もなく修了したので幸いであつた。

園長であつた私は、それから一年余の後、小学校の校長先生方の仲間にはいつて、校長講習を受けたが、学校卒業後三十年余りを経ていたから、在学当時を思い出して懐しく愉快であつた。それに「法律と道徳」とか「宗教学の任務」とか、学校外でしか受

けられなかった講演もあって楽しかった。そしてこの講習が終わって、やはり一年半ほどで、校長一級普通免許状をもらったのである。こうした同じ仲間だった校長先生の中には、顔なじみの方が多くて実際楽しかった。

二 健康は仕事に追われてなお楽し

そのころ、幼児の在籍数は増加するばかりであったし、しかも園舎が戦災をのがれて全部残っていて、その上園舎の所在が、全市的に見ても中央にあつたので、教育的または公共的な会合の会場として使用せられた。他の幼稚園より雑用が多かつたため、教育部の好意により、従来いた校務員に一名を増加して下さつたから、男子三名と女子一名になつたが、誰一人不足もいわず、雑用は大体分担していたが、それでも雑用に追われていて忙しそうであつた。

けれども皆は、にこにこして助け合っていたので、私は嬉しかつた。

三 計画の実施前には注意事項を再三熟慮すること

昭和二十四年十月二十九日は、関西保育大会の開催当日であつた。今回は本年度の当番が神戸保育会であつたから、したがつて会場は神戸高等学校で開催されたのである。

私はきょうの大会を以前から楽しみに待っていた。それはこれまでの大会には、どこでも熱心に研究されて、発表せられていて、いつも何らかの収穫を得て帰ってきたが、特に神戸地方は、どこの試験でも、いつでも総体的に学力が高くて、むずかしいという噂を、以前から聞いていた。今年の大会を想像して楽しみにながら、「特に今回は大阪にも近いしするから、全職員が出席して勉強してきましょう」と話合っていた。

それで当日の保育予定は、前々日に各家庭に通知して、連絡をとっておいたから、この日は朝の会集が終わると、すぐ平常と同じように帰宅させ、職員らはそのまま国鉄を利用して遅参を覚悟で出席したのである。

私は大阪保育会の幹事に当たっていたから、開会時にはすでに出席していて、研究発表もいろいろ聞くことができるので、帰園後に伝えることを約束しておいたのである。

研究発表を聞いている時、私のそばに一人の役員らしい人がきて、「愛珠幼稚園から電話です。だいぶ急ぎらしいです」と知らされたので、隣の席にいた大阪保育会の人に席を頼み、急いで電話室にいった。

受話機を取るとすぐ原校務員とわかつたので、「原さんなに？」と尋ねると、「先生はきょう、組合の人にお座敷を貸すと約束しましたか」「いいえ!! 組合の人はそんなことをいうていま

すか」「黙ってなにもいいはりません」「私は貸す約束をしてないから帰ってもらって下さい」「それでも組合の人は、四、五人がかんてきを持ってきて、火を起こして分けてはりますねん。きようは先生らは皆神戸の保育大会へ行ってお留守ですので、私ら校務員は勝手にお貸しすることはできません。園長先生が貸すといわれたのやったら、神戸へいきはる時私らにそのことをいいはるのに、なにもいいはりませんでしたので、勝手にお貸しすることはできません。そばからおじさんらが、『あんなら、勝手に押しかけてきはったんでんな』というど、『そんなことはぼくらは知らんけど、かんてきに火を作っといてくれといわれただけですねん、奥にいる人にそのわけをいうとくなくさい』というてしらん顔をして、どんどんほかのかんてきに火を移してはりますねん。なにをいうても聞こうともせず、そ知らん顔で空吹く風ですねん、おじさんたちが、奥でちよいちよい聞いたことですが、どうやらきょうの師道顕揚の祭典が終わったら、係の人や招待された人たちがここへきて、昼食をしたり、祭典後の始末を整理せられるらしいそうです」

「ふうん!! 私ほきょうのことで組合からなにも聞いていません。組合から一言のあいさつも聞かず、また依頼も受けていません。もし私が聞いたとしたら、即座に断ります。それに知ってか知らずか、全職員のお留守の間に押しかけてきて、許可も聞か

ず、組合としての大きな行事をするとは、これは家宅侵入です。管理する責任者の留守の間に、はいり込んで組合の仕事をしたことになるからなあ——」「おじさんたちも怒ってはりまして、火をこぼされたり、不始末から大事になってはと、かんてきの敷物を渡したり、灰皿を貸したりしはりました。私が電話をかけてる間に、そんな手伝いをしたりして、校務員も忙しゅうなりました」

終戦以来、新興のこうした組合や、組合みたいな団体には、以上のような形ものがよくあつて、しかもそれが社会人や、一般団体より、一歩も二歩も進んでいる新興団体であるかのように、大衆に率先して進んでいくもののように思い込んで、自分らを優位におき、礼儀や作法を無視して、そこに存在しているものは、自分らの仲間の人だけというような形の人が多かつた。

「原さん、腹が立つやろうけれど、もうなにも思ひなさんな。私にそれを知らせて下さったが、私は今帰りたいが、まだ愛珠へは帰れないから、用事が少し手すきになったらほかの人に頼んで席をはずさせてもらい、早々に帰りますわ。あなたたちは残り火に気をつけて、煙草の火にも用心して、火事を起こさぬように注意して待っていてちょうだいや」と頼み、また「おじさんたちにもよくこのことをいって、あなたからも頼んでおいてちょうだいな。私が留守をしてあなたたちに心配をさせて悪かつたが、組合

の人がいる間に帰りますわ——」「先生も気をつけて、早う帰ってちょうだいや」と話は切れた。

私が会場へ帰ってきた時には、さっきの研究発表はもう終わって、ほかの保育会の研究発表が始まっていた。しかし私の心中には、組合の人らの家宅侵入の無礼さに、胸はおさまらなかつたのである。そして「どうぞ愛珠に事故のないように」とひたすら心中に念じていたのである。時を得たので早速会場を辞去し、三の宮駅から大阪梅田駅に着くと、六時五分前であった。組合の人が一人でもいてほしいと思ひながら、駅の正面玄関で自動車を拾い、今橋三丁目の井池角までといいながら車に乗って、さいふを取り出し、すぐ支払えるように用意して待っていた。

そのころ、御堂筋はまだ一方通行でなかつたから、車は間もなく愛珠幼稚園に着いた。

正門はもう閉まっていた、組合の人は帰つたと想像して、私はちょっと失望したけれども、遊戯室を走るように通り抜けて、職員室にはいると、誰か一人だけ電話をかけている声がしたので、一人でもこの実状を見てもらえると思つて嬉しかつた。

職員室の様子で、組合の人は誰もいないらしいが、電話をかけている背広の人は、誰かわからないが、組合の人であつてほしいと思つた。自分が門に着いた時、いっしょに門から走つてきた原校務員に、「組合の人らは？」と尋ねると、「組合の人らは二十

分ほど前に、皆帰りはりました。それで、火の用心や戸締りなどを調べましたが、その時は組合の人も二、三人ほど、手伝うてくれはつて、ついさつき岩井さんらも帰りはりました。なあ!!秋田さん」いつの間にか秋田校務員もきていた。

「秋田さんも、原さんも、ほんとに御苦労でしたなあ。神戸にいても、いる間中、私は案じて事故が起こらぬように念じていましたで!!」と早口でいつている時、電話をかけていた背広の人の話が切れたから、私は二、三歩そばへいつて、「あなたはどなたですか、組合の方ですか。無断できょうのようなことをせられますと、当方は大層迷惑をします。一言のあいさつもなく、許しも受けず、幼稚園の職員の留守の間にこられて、勝手にこうした会合をせられたそうで大層失礼だと思ひました。しかし事故がなくて当方からいえば不幸中の幸いでしたが、これは全く家宅侵入だと思ひますわ。もし私が、最初にこのあいさつを聞いていたら、即座に断りましたのに。当方の事情を知つてか知らずか、留守の間に押しかけてきて、こうした仕事をなされたとは、何度もうようですが、全く家宅侵入ですで——」

私の胸におさまらない気持を、背広の人は察したらしく、「いわれる通り家宅侵入です。僕はきょう招待されてきた者で、組合の者ではありません」。「そうですか。組合の方とは違いますか」「新聞記者です」「そうでしたか!! それは失礼しました。それ

なら、第三者として考えてみて下さい。会場に使いたければ、最初、幼稚園にさしつかえの有無を問うべきだと思いますわ。

きょう私たちが神戸へいったことは、関西五市連合の、年に一回輪番で開催される保育大会の神戸保育会の当番の日でした。それだから、組合が幼稚園での会場開催の都合を問い合わせると、当然お断わりの日であったのに、それなのに一言の都合の有無を尋ねないとは、全く幼稚園を無視していると思います。それに畳の和室で、昼食だとして火を使う。剝焼をするとは、全くひどいですわ。私が怒るのは当然と思われませんか」

「お話を聞いてよくわかりました。自分はきょう招待されてきた者で、この通り案内状を持っています」私は「ちょっと拝見」として、半紙に謄写したその案内状を見せてもらった。

「これは私が一週間前にもらったものです」といながら渡されたが、一週間前に原稿ができていたとすれば、愛珠へはそれより以前に、会場の都合を尋ねるべきであるのに、なにもないとは全く無視していると思った。私は案内状をたたみながら返し、「あなたにいろいろお話をしてお断りを遅くしてすみませんでした。ご免なさいなあ!!」「いや!!失敬します」足音は遊戯室の方へ消えていった。

それから二人の校務員に、「きょうは皆にご苦労をかけましたなア!! 原さんも遅うまでいろいろ有難うでした!! ほんとにお

おきに。きょうは秋田さんが宿直? 皆疲れなさったやろ!! ゆっくり休んでちょうだいや、——私はそこから地下鉄で帰りますわ」といって、めいめい家路についた。

帰宅後はなにもいわず、すぐ入浴をすませて床につき、愛珠におけるきょう一日の実状を、くわしく粉飾することなく、組合の委員長に手紙で知らせ、考慮してもらいたく、構想を考えていたが、疲れていたのかいつの間にか、寝入ってしまったらしい。

翌朝は、平素より早く起床し、手早く文度をするそと妹のみに知らせて、愛珠幼稚園に出動した。幼稚園では秋田校務員が起きていたので、すぐ畳の部屋にはいって、きのうの実状の一部始終を、ありのままに手紙に書き上げた。

そして朝の会集が終わるとすぐ、私は前PTA、すなわち後援会時代の会長の、内藤正剛先生のお宅を訪れて、きのうの顛末を報告してから、委員長への手紙も見てもらい、弁護士としての判断をしてもらい、もしこの問題が尾を引いて、複雑になってきた場合にはよろしくおさげ下さいと、断乎とした私の決心もいって覚悟のほどを申して依頼した。

内藤先生は、私が願いをいい終わった時、「ふん!!」と返答をせられたから、幼稚園までの約一丁ほどの距離を、小走りのようにして帰り、持っていた今の手紙を、折返して秋田校務員に、東へ三丁ほど先の教員組合の事務所へ持参してもらった。

この日の翌々日、組合からだとして、二人の若い事務員が、私に面会だとして来園せられたが、「私は委員長先生にお手紙をしましたが、事務の先生にはいたしておりませんから、お帰りになったらそのようにお伝え下さいませ」といって帰ってもらった。それから二日の後、事務の先生がまた二人来園せられたが、最初の人たちよりも、少し年配であった。しかし前回と同様に、あいさつした後、「私は委員長先生にお目にかかりたいのですから、このことを申し上げて下さいませ」といって、なにも語らなかつたのであった。

翌日の正午過ぎ、若い一人の係員がきて、「この間はすみませんでした」というから、「先日の手紙は、委員長先生にお出ししたので、すみませんが委員長先生にお越し願ひたいのでして、先生のお忙しいことはよく存じていますが、お願いしますと申して下さい」といって、やはりなにもいわなかつた。

翌日原校務員が、「組合の人が二人、応接室に待っておられます」といって、職員室に走って知らせにきたから、私が応接室へいくと、組合専従の人が二人いた。「組合の方ですか」と尋ねると、「そうです」との返事であったが、二人はちよつと笑顔を作って、「委員長は所用のためちよつと出られませんが、この間はすみませんでした」と真面目にあいさつをせられたから、私も笑顔で「委員長先生にお目にかかり、お話をしたいのですからと、

帰られたらそれをお伝え下さいませんか」と再びいった。「委員長は非常に忙しいので、出にくいため私らがきましたが——ご利用はなんでしょうか」

「お忙しいことでしょうか、先日お手紙でお話してありますから、ご存じと思います、さようお伝え下さいませ。せっかくお越し下さいましたが、失礼します」とあいさつをして職員室に帰つた。

そしてこの日から三日経た日、午前十時ごろ、岩井校務員が「教員組合からというて、先生が三人お越しになりました」といって、知らせにきてくれたから、私が応接室にいくと、年配の先生が中央に、そして両脇には、もし若い、しかし相当お年を召されている中堅らしい先生が、威儀を正してすわっておられた。

この間こられた人かもしれないが、顔は覚えていなかった。「お待ちせしました」といって一礼すると、中央の先生の向う側へ、私はすわつた。

中央の年配の先生が、委員長であることはすぐわかつたのである。それで私は委員長先生に向かつて、「先生は日々お忙しいと、ご苦労をおかけしていることはよく存じておりまして、有難うございます」と申すと、先生もなごやかにえまれ、「先日はお手紙をいただきご注意はよくわかりました。——私がすぐ参りたかつたのですが、雑用に追われてつい勝手に失礼しました」

「当方もまた、再三お使いの方をお帰しして、すみませんでしたが、私は先生にお目にかかって、再三お帰しした失礼のおわびと、また今後このような機会には、前もって一言、当園の都合を、お聞き合わせいただきたく、お願いしたかったので。―それと申しますのは、疎開先から返ってきた、現在では得難い明治初年の教育資料が、この幼稚園にあります。それらをあわせて来年の創立七十年記念日までに、整理整頓して、我國の幼児教育の発展段階を、明らかに披瀝し、あわせて幼稚園開設当時の創設者たちの意気と誠意の真実を、この園舎の建築の中にもおりこんで語っておられます。それをあとからくる者への無言の教えとして、次々に語り伝える資料にもしたかったので、これは私人の思いつきでなく、文部省をはじめ、幼稚園教育関係の団体でも、皆、この愛珠の内容や実際をご存じですから、私たちもこれを宝と想って大切に参考にさせてもらっています。それでもし私たちが不在になることがわかっていような時には、校務員が全部留守居するようにしていたのです。

あの日も例の通り非常時の心構えで、仕事の分担をしていたそうですので、実は前もってご使用のことがわかっていたので、一言おっしゃっていただきたかったと思いましたが―幸いになにもなくてよかったですと感謝しました」

「中村さんすまんことでした。ばくもちょっと注意すればよか

った。あのころ仕事に追われていたので、あなたにまで心づかいをさせてすまなかったと思います」。「いえ!! 会場の交渉や決定のことぐらいいは、原稿作製係の方が念を押せばよいので、先生は教育内容や制度のことなどの大きいことに、お心を使われるのですから、会場の件などは、特殊な事情のないかぎり、委員長の補佐役の仕事であって、その内容の軽重を一応見計らって事に当たらねば」。「とんだ失敗もあって、―なかなかむずかしいものではないあ!!」。「そうですよ」

「あの日は折あしく、昔ここを卒園して、その後もずっとわがことのように園をかばって下さる方が、この区内に引続き大きく商舗をもっておられ―いわゆる幼なじみの一人が、たまたま来園せられ、見知らぬ人々が食事中でしたので、小使さんに尋ねると驚いて引き返されたそうですが、幼稚園の職員が校務員より外に誰もいないので、非常に案じて帰られたそうです。それがよりよりに伝わって、これを聞いた人の中には、非常に不快に思っている人があるそうですから。中には由緒ある幼稚園内をあけて、他団体に貸し、食事をさせるとは不謹慎だとききまいて、一札もらわねばならぬと、いい出した人さえできたから、私は早く委員長先生にお目にかかり、このことをご相談したかったのです。先生! 一行でも結構ですから、すまなかったと一筆頂だいできませんか」

「中村さん、すまないがそれは許してもらいたいですね」「先生、すみませんでした!! 私も同じ組合員ですから、区内の人々によく話して、この件はきょうで取消してもらいます。お忙しいのにきょうはわざわざお越しをいただき、いろいろお心づかいをかけてすみませんでした」

「それでは失礼します」委員長ら三人は帰られた。

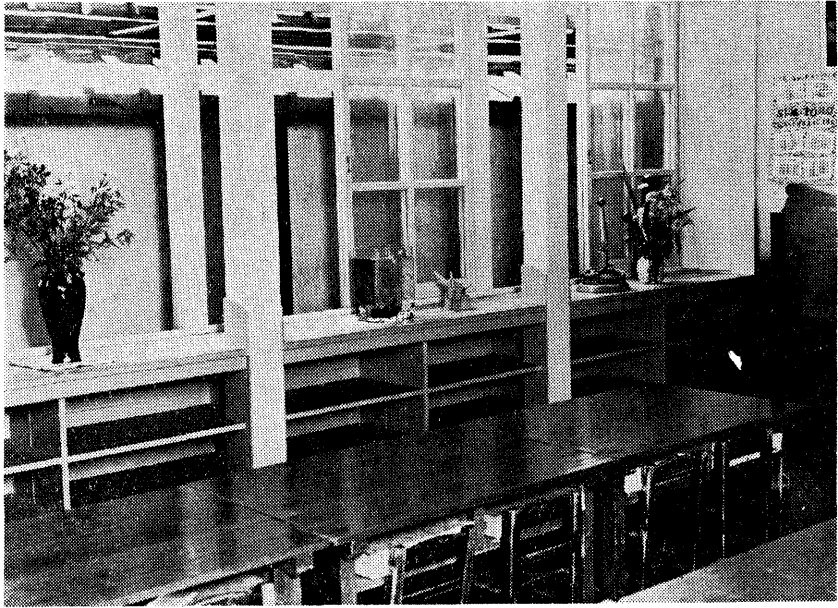
校務員や職員達も、皆ほっとしたような面持であったので、私もひそかに安心したのである。

四 学校監査を受く

昭和二十四年八月九日午前十時過ぎごろ、同じ学区である愛日小学校の教頭が来園せられ、笑いながら「先生また骨折りができました。きょう市役所からの連絡に、また会計監査を始めるというてきました。最初は愛日やそうで、愛珠が第二番目です。それでちょっとでもはよう知らせてあげた方が、よかろうと校長もいふから、市の通牒を受けるとすぐきましてん」「まあ!! そうでしたか、ご親切におおきに有難う。お互いに、最初やったら落度のないようにしっかりやりましょう。——けれども私は会計監査を受けたことがないから、どんなことをなさるのか心配ですわ!!」「会計監査は市長直属の仕事で、まあいえば、校園の財産調べみたいなもので、日々の学校の授業や保育と同様に、大

切な仕事です。——けれど、そんなに心配しなさんでもよろしい。先方が保管の帳簿を皆出してほしいといえ、全部出して調査してもらい、質問があればその説明をしたらよろしいので、筋が通っていればなにも心配はいりませんで」「そうですか——」「保管の帳簿といえ、幼稚園やったら保育料の收支や、職員の俸給の支出状況、それに市費関係の全部の出納を、台帳に漏れなく記載し、それにあわせてそれらの請求書と領収書を揃えて出したらよろしいので、別に心配はいりませんで——」「細かく教えて下さったからよくわかりました」

「あッ! それから、PTA会費の收支も、皆幼稚園関係の分と同じで、台帳も請求書と領収書といっしょに綴っておいておかないけませんで!!」「へえ!! そうですか。PTA関係もですか? へえ——よくわかりました!! いろいろご親切に教えてください。ただいって有難うございました。それにしても先生のお時間を、たくさん取りましたなあ!! ごめんなさいなあ!! きょうはまことに有難うございました」といって別れたが、教頭は笑いながらあともしりして、「それからうっかりしていましたが、寄付全部は、市関係もPTA関係も書き落としないように各台帳にも記載しといて下さいな。不審なことがあったら遠慮なしに尋ねて下さい。こっちは勉強になりますからな」「おおきに有難うございました」



写真(上)

保育室

窓は一尺押し出し、腰板をはずしたなを作り、保育材料をおく。

伊達教頭は愛日小学校の方へ帰られたが、私はこの整理の段取りを考えながら、そばにいたきょうの日直者に、「大変なものが回ってきましたな!! 皆にまた骨折りを願わねばならぬから、ほんとお気の毒やわ。早速ですけれど、このことを、皆の先生に電話連絡で、休み中ですけれどあしたは十一時に、愛珠へ必ず集合して下さるよう、知らせてくださいな。会計監査の当番のこと、お話がありますから、必ずお越し下さるようお願いして下さいな。お願いしますわ」

「なが出るかわからないが、するだけのことは精一杯いたしましょうと、自分にいい聞かせた。

みどり会主催夏季研修会

主題 保育のこころを求めて

講演 「自由人とは自然の人ということである」

分科会

第一「保育のこころ」

講師 周郷博先生

第二「三歳児保育」

講師 東京家政大学教授 阿部明子先生

第三「あそびの指導とは」

講師 お茶の水女子大学教授 津守 真先生

第四「園長像など」

講師 聖徳女子短期大学教授 山村きよ先生

場所 箱根湯本ホテル 箱根湯本町滝通り 「2」箱根④ 七一五一—四
 期日 八月二十四(火)～二十六日(木) 二泊三日 申込詳細は次号

日		程		月日	時間
26木	25水	8/24火			
起床	起床			7	午前
朝食	朝食			8	
分科会	講演			9	
				10	
閉会式				11	
昼食	昼食	受付	付式	12	
解散		開会	式	1	午後
	分科会	整理	入浴	2	
				3	
		夕食	夕食	4	
	入浴	顔合せ	自由	5	
	懇話会	時間		6	
				7	
				8	

幼児の教育 第七十巻 第六号

六月号 © 定価一〇〇円

昭和四十六年 五月二十五日印刷
 昭和四十六年 六月 一 日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一
 お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
 発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一
 お茶の水女子大学附属幼稚園内
 発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ二一
 印刷所 凸版印刷株式会社

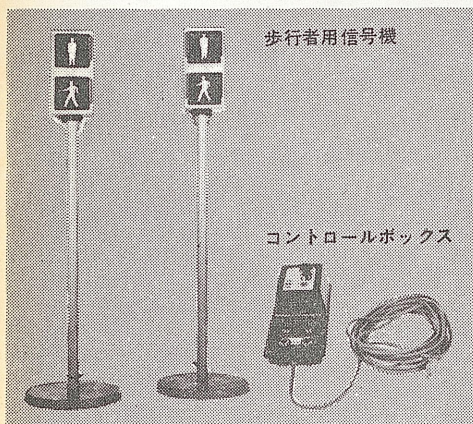
101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
 発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番
 © 本誌御購読についての御注文は発売所
 フレーベル館にお願いいたします

ピーッ!! はい、横断どうぞ



電動式信号機



歩行者用信号機

コントロールボックス

現代は、まさに交通戦争の時代。交通ルールをわきまえているはずのおとなでさえも危険な時に、幼児たちは……

考えただけでも恐ろしいことです。楽しい遊びをとおして幼児たちに基本的な交通道徳や交通規則を、おしえておきましょう。

フレール館が研究開発した、教材用信号機は、〈電動式で親子方式〉です。コンセントにコードをさしこめば準備完了。機種は2種類〔3つ目の電動式信号機〕と〔歩行者用信号機〕があります。保育カリキュラムの中に、ぜひとりいれてください。

電動式信号機

電動式 歩行者用信号機

電動式信号機

基本1セット(親子各1台) 43,000円
 親1台……………27,000円
 子1台……………16,000円
 親1台・子3台(計4台) ……75,000円

歩行者用信号機

基本1セット(親子各1台) 43,000円
 親1台……………27,000円
 子1台……………16,000円
 親1台・子3台(計4台) ……75,000円

株式会社 **フレール館**

なつのおとせがたち



おかあさんといっしょの夏

ことしもまた、長い夏休みがやってきました。夏休みは、とくにおかあさんとのふれあいの多いとき。ことしの「なつのおともだち」は、「おかあさんといっしょに」をテーマに「たいそう」「みずあそび」など、夏の健康に欠かせない遊びや、夏の生活指導など、母と子がともに楽しめるように考えました。

規格 (1)年少用 (2)年長用

A4変形ワイド判 表紙ビニールびき

本文24ページ(カラー12ページ・1色12ページ)

■①年少用・②年長用 各100円■

お求めは、もよりの代理店・支社・支店・出張所へ。

付録「なつのはらひ」(生活表)

- B5判 16ページ
- 多色刷のカットをふんだんにとり入れました。
- 子供自身できめる約束の欄がもうけてあります。
- 幼児に扱いやすいように記入の欄のまちは大きくなりました。

付録「きぬいとそうのたね」(種の実物)

- 実物の種をつかって発芽の観察がたのしくできます。